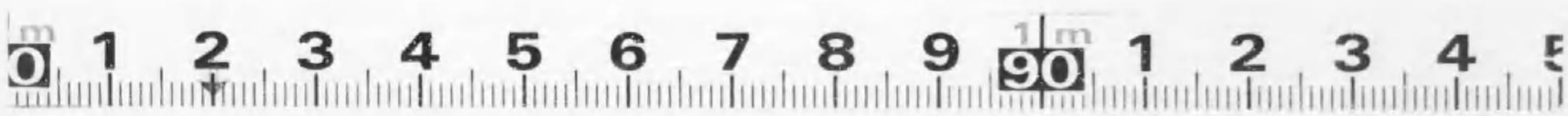


517
116

577-116

近代歌謡集

全

緒言

本集は隆達小唄集以下十種を收め、近世俗謠の主要なるものを網羅せり。

一隆達小唄集　慶長より天和の頃まで隆達節として專ら世に行はる。隆達の事蹟は堺鑑（天和三年著）に「高三（タカザウ）隆達、元は日蓮宗の僧、當津顯本寺の寺内に住す　故ありて還俗し、高三氏の家に往て藥種を商ふ、年を經て小歌の節を一流謳ひ出すより、世俗隆達流とて謳ひ賞翫す」とある外所見なし。某氏所藏の肖畫に「自在院隆達慶長十六年十一月二十五日寂八十五歳」と記したれどいかゞにや。慶長元和頃の年月日を記し自庵隆達と署名せる節付の寫本往々世に存す。（寛文の書籍目錄にりうたつのうた一冊とあれば刊本もありしなるべし）就中大槻如電氏の藏本歌數最も多きを以て之に據れり。

一吉原小歌總まくり　北里に流行したる小歌を集む。萬治板といふもの今存せず、所謂寛文板なるもの二本を見たれども、序跋も刊行年月もなく、只紙末に「江戸さかい町中島屋伊左衛門」と版元の名あるのみなり。種彦は其著足薪翁之記に天和二年印行とし、寛

文といふは誤也と斷言せり。とにかく初板を萬治三年再板を寛文二年といふは疑問なり。

茲には文政二年琢玉齋の覆刻本を採用せり。

一山家鳥虫歌　京都大學藏本にて上下二册あり。（下卷は寫本にて補足）諸國盆踊唱歌の外題にて我自刊我書中に收めたるものの原本と思はる。我自刊我本（之によりたる國書刊行會本も）は近江美濃飛驒信濃上野の部を闕き、尙其他三首合計二十三首を脫せり。我自刊我本の原本としたる種彥舊藏本（和田維四郎氏所藏）は山城の部に一首不足したるのみにて、其他は遺漏なしとの事なれば、刊行の際寫しおとしゝなるべし。

一糸竹初心集　一節切琴三味線の手引として著されたるもの　寛文四年版と寛文十二年版（山形屋吉兵衛板）とあり、尙挿畫を改めたる零本を發見したれば　都合三版あるものの如し。本書頭註に再版本といへるは、寛文十二年版をさすものと知られたし。

一當世こうた揃　紙數十四丁の小本にて五ヶ所に遊女の繪を挿み、簡單なる詞がきを添へたり。原本は京都大學の藏本にて笠亭仙果の影寫にかゝる。元祿頃の刊行なるべきか。

一松の葉　組歌長歌端歌吾妻淨瑠璃投節等を結集し、採錄頗る廣く、俗謠集中最も著名なるものにして、元祿十六年秀松軒の編する所なり。

一增補松の落葉　寶永七年扇德の編にて、松の葉に漏れたる吾妻淨瑠璃踊歌歌舞妓芝居の唱歌等を收む。

一若みどり　寶永三年靜雲閣主人の編にて、長歌端歌吾妻淨瑠璃等の新曲を收む。正德三年此書を續松の葉と改題したるも、たゞ吾妻淨瑠璃に「かよひぢ」の一曲を增加したるのみにて、其他は全く相同じ。

一松月鈔　琴の組歌の註釋書中最も古きものにして、元祿七年吉田邑琴子の著なり。元祿十二年出版の知音之媒といふ書は、これを剽竊したるものにて、挿畫を改め頭註の辭句を少しく改竄して別册に移したるに過ぎず。

一三阮歌曲解　上方唄の散紅葉と雪との評釋なり。こは萬葉集古義の著者として知られたる鹿持雅澄がすさびなり。

本集校訂にあたり、讀者の便宜を謀りて、句點をつけ、假名遣を一定し、漢字を宛てたれども、聊にても文意の疑はしきもの、發音に差異を來すべきもの、清濁の轉訛等、すべて歌ひ物として注意すべき所は、一切原本のまゝにして改訂を加へず。

大正四年七月

校訂者　藤井紫影

近代歌謠集　目錄

隆達小唄集……一―一四
よしはら小歌鹿の子……一五―三七
山家鳥虫歌……三九―一〇八
卷之上……四一
卷之下……八六
糸竹初心集……一〇九―一五四
上卷……一一三
中卷……一二八
下卷……一三九
當世小唄揃……一五五―一六四
松の葉……一六五―三三二
第一卷
本手……一六九
端手……一七二
裏組……一八一
祕曲相傳之次第……一八九
第二卷
長歌……一九四
第三卷
端歌……二四一
二上り……二六八
三下り……二七七
さわぎ……二八〇
第四卷
吾妻淨瑠璃……二九六
第五卷
古今百首なげぶし……三一八
歌音聲並三味線彈方心得……三二八
松の落葉……三三三―五六六
首卷

隆達小唄集

目錄

あづま淨瑠璃……三三五
小歌……三六二
卷第二
當流淨瑠璃……三六六
卷第三
丹前出端……三九一
古今ぶし……四一二
卷第四
踊歌百番……四二五
卷第五
はやり歌……四七八
卷第六
當流所作……五〇七
若みどり……五五七—六六〇
第一卷
長歌……五六三
第二卷
長歌……五七六
第三卷
端歌……六〇一
第四卷
二上り……六二七
三下り……六四〇
さわぎ……六四四
第五卷
牛太夫節……六五二
松月鈔……六六一—六九二
三阮歌曲（知里毛美地 遊幾）解……六九三—七〇二
落黃葉……六九三
雪……六九七

隆達小唄集

一君が代は千代に八千代にさゞれ石の、巌となりて苔のむすまで

一思ひ切れとは身のまゝか、誰かは切らん戀の道

世は皆人のいひなし一世に節の意をかゝ、言ひなしに結ぶ成しをかく

一雪折れ竹をそのまゝ垣に、世は皆人のいひなし

一月夜の烏はほれて鳴く、我も烏かそなたに惚れて泣く

一不審ならば鐘打たう、いや鐘も無益、たゞふりにて知るものを

驚げ一日をさませ

一そなた故にこそ憂名の立つに、のう驚けよの、まづはおよるよの

ふまるる眠る

一相思ふ中さへかはる世の習ひ、ましてやうすき人な頼みそ

一種とりて植ゑじ、植ゑなば武藏野もせばくやあらん、わが思草

あはでこがるゝ一逢はで焦るる、阿波で漕がるゝ

一みるめばかりに波立ちて、鳴渡舟かやあはでこがるゝ

みるめ―見る目、海松

ひるま―干る間、晝間

よる―寄る、夜

ちやうはんかね―未詳

一枕の海は浪立つばかり、さらばみるめのありもせで
一逢はぬ恨みはつもれども、見れば言の葉もなし
一うらみあるこそ頼みなれ、思はぬ中はふらずふられず
一逢ふは稀よ獨寢はしげし、あの君ゆゑにあらぬ名の立つ
一逢ふ時は秋の夜もはや明けやすや、ひとりぬる夜の長の夏の夜
一緣さへあらば又もめぐり逢はうか、命に定めない程に
一野分山おろしも身にしまぬ、宵々ごとに君を待つには
一比翼連理のかたらひも、心かはれば水に降る雪
一思はど君よ、しほひるまにも、必ず波のよるとなしとも
一問へば問ふとてふらるゝ、とはねばつらるゝ
一君待ちて待ちかねて、ちやうはんかねの其下での、したゝしたゝしたゝをふむ
一いかにせんゝとぞいはれける、物思ふ時の獨言には

よの―慈詞

歸る姿を―此唄閑吟集に、「うしろ影を見んとすれば霧がのう朝霧が」とあり

身はならはし―小野家集、「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける」閑吟集に「ふたり寢しものひとりもゝねられけるぞや身は習はしよのう身は習はしの物かな」

一な亂れそよの糸薄、いとど心の亂るゝに
一みめがよければ心も深し、花に匂ひのあるもことわり
一君も見るやと眺むれば、うはの空なる月もなつかし
一待てとはそなたのそら情心よ、いや待つまじや待つまじ
一明日をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうらやかに
一歸る姿を見んと思へば、霧がの、朝霧が
一ひとりも寢けるもの寢られけるもの、習はしよの、身はならはしのものかの
一笑止や憂世やうらめしや、思ふ人には添ひもせで
一袖を引くとて腹なな立てそ、深山石坂の坂のいばらを人のひかばや
一月夜のうさよゝ、闇なるべくは曇らじをくもらじを
一ちとせ經るとも散らざる花と、心の變らぬ人もがな
一そなた故にぞ身を焦す、さらばけぶりと消えもせで

一よしや思はじと思へども、心まかせにならぬよの
一志賀の浦とてしほはないが、顔のゑくぼは十五夜の月
一物のしゆんなはの春雨、猶もしゆんなば旅のひとりね
一花に嵐の吹かば吹け、君の心のよそへ散らずば
一ひとり寝てふたりぬる夜の有様を、語るな人に、のう枕
一みゝゆると情あれかし、夢にさへつれなの振や、のう君は
一月は濁りの水にも宿る、数ならぬ身に情あれ君
一花よ月よと暮せ只、程は無いもの憂世は
一憂世は夢よ消えてはいらぬとかいのう、とけてとかいの
一せめて詞をうらやかにの、今歸るわれに何の怨みぞ
一夢は隔てず海山をこえても見ゆる、夜な〳〵に
一月待つ月はさえもせで、君待つ月はさゆるよの

しゆんな—身にしみ〳〵感ずる意か

みゝゆる—會見する

程—際限

一思ひよらずの會釋のふりや、恨みのこともはたと忘れた
一面影は手にもたまらず又消えて、そはぬ情の怨みかず〳〵
一雨のふる夜の獨寝はいづれ雨とも涙とも
一引かば驚けとよ糸薄、枯野になればいらぬ憂身を
一怨みたけれども、いや身の程もなや、惣じて怨みも人によりけ
一しばし待て硯の上のうす氷、打っとけてこそ文もかゝるれ
一身はやれ笠きもせで、すげなの君や掛けて置く
一しぐれけもの神無月、晴れては曇りふりごころ
一君の心が變れかし、つれなき心の
一梅は匂ひよ木立はいらぬ、人は心よ姿はいらぬ
一武藏野のひともと薄、獨寝も憂やつれもなや
一とても名の立たば宵からおりやれ、よそへ忍びの歸るさはいや

やれ笠—破笠
きもせで—來と著とにかく、此唄閑吟集に、「身は破れ笠よのう、きもせでかけてゐかるゝ」とあり

頼むぞ云々―我儕なる扇も帶も願はくば祕密を洩す勿れ

いつもあかつき―閑吟集に、「めぐる外山に鳴く鹿は逢うた別れか逢はぬ恨みか」

心氣―心のいちだち惱ましきこと

一人は知るまじ我中を、頼むぞそばの扇も帶も
一とても消ゆべき露の身を、夢のまなりと夢のまなりとも
一いつもあかつき鳴く鹿は、逢はで鳴く音か、逢うて別れを鳴く音か
一いへば世にふる世にふるよ、いはねば憂人のそれと知らばや
一此春は花にまさりし君持ちて、青柳のいと亂れ亂
一心氣の花は夜々に咲く、情の花のひと夜咲かぬか
一鐘も鳴る夜も更けぬ、あぢきなの我身や、獨寢をする
一鐘さへ鳴ればもいなうとおしやる、こよは佛法東漸のみなもと、初夜後夜の鐘はいつも鳴る
一長の枕に廣のしとねや、明けぬ夜や、さて捨てらるよ憂身は
一生るよも育ちも知らぬ人の子を、いとをしいは何の因果ぞの
一夏の夜を寢ぬに明くるといふ人は、物を思はぬか物を思はぬかの

のかいはなさい―のけはなせ

落つる―戀におつるをいふ

色には出ぬ―出ぬは出さぬと讀むべきか

一のかいはなさい帶がとくる、今にかぎらうか逢はうものを
一獨寢もよやの、あかつきの別れ思へばの
一ひとり寢はいやよ、あかつきの別れありとも
一竹ほど直なる物はなけれども、雪々積れば末は靡くに
一月もろともに立ちいでて、月は山の端に入る、われは妻戸に
一亂れそめては人目もいらぬ、馴れぬ昔に思案せうずもの
一忍ぶ身にさへ惜氣をめさる、忍ばぬ身ならば扨何とあらうぞの
一そなた忍ぶと名はたちて、枕ならぶる間もなやの
一つれなのふりや、すげなの顏や、あのやうな人がはたと落つる
一忍ぶ身なれば色には出ぬ、あたど心をつくすよの
一八重だつ雲の上人に、馴れてくやしや捨てらるよ
一人には馴れて馴れまじものを、今此思ひ何にたとへん

一思ひきりたる雨の夜に、夢かや君のおとづれは
一手に手をしめてほと〳〵と叩く、我はそなたの小鼓か
一誰かつくりし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ
一誰か再び花さかん、あたゞ夢のまの露の身に
一ひとりおよらばまるらうずものを伽に、雨降り眞の闇なりと
一夢にも見ゆらんとまどろめば、笑止と雨の枕うつ音
一まどろまば夢にも見るべきに、うつゝなや戀には目も合はぬものか
一忍ぶ中よそへ漏すな、かはるとも、添はぬは憂世、名こそ惜しけれ
一君かや閨には訪ひもこで、月にはあらはれて名の立つにの
一尺八のひとよぎりこそ音もよけれ、君と一夜は寢も足らぬ
一情かけうもの、くやしやな、なんぼう戀には身が細る
一人はよいものとにかくに、やぶれ車よわがわるい

ひとよぎり―一節切
わが―袖が、我

一曇らばくもれ照るとても、君を思ひの晴るゝでもなし
一又も逢はうずは不慮でも、優曇華の花今ばかり
一花を嵐のさそはぬさきに、いざおりやれ花をみ吉野へ
一花を嵐の散らすやうな雪に袖打拂ひ、誰かおりやらうぞの
一花が見たくば吉野へおりやれの、吉野の花は今がさかりぢや
一あるはいやなり成るもいやなり、思ふは成らず、扨もよしなやな、なとせうぞの
一立たば立て我名、君ゆゑならば惜しからぬ命
一恪氣心か枕な投げそ、投げそ枕に咎はよもあらじ
一いや〳〵は思ひの餘りのうら、合せてたまうれ合せてたまうれ、とにかくに
一ちたびもゝたびおしやるとも成るまじものを、うつゝなのそなたや、我にぬしある、
思ひ切れとよ
一たとへ事には便なけれども、身の影法師に君をなして添はいで

なと―何と
便なけれども―不都合なれども

かたびら雪―大ぴらの雪をいふ
裏ならし―裏巻をいふ
礒にすむまじ―此唄閑吟集に、「みるゝ〜戀となる物をとあり
みるめ―海松、見る目
なは―尚一層面白かるべし

一忘るゝものを又ふりかゝる、かたびら雪の消えもせで
一帶をやりたれば、しならしの帶とて非難をおしやる、帶がしならしならば、そなたの肌は寢ならし
一つゝめども色は涙にあらはれて、袖にとく〜とくとくとくと
一千夜もゝよは及びなや君、いなの小笹のせめてひと夜を
一つゝめども色には出るぞ、これ見よ袖の涙を
一礒にはすむまじ、さなきだにみるめに戀のまさるに
一逢へば人知る、逢はねば肝がいらるゝ、あ笑止やの
一いとはるゝ身となりはてば、せめて我身の咎も身の咎もがな
一初夜かと思うた、あ憂や、別れの六つぢやもの
一おもしろのお月や、ふたり見ばなほ
一君の情の深きゆゑか、思ひし程は名も立たぬ
一寢ても覺めても忘れぬ君を、焦れ死なぬは異なものぢや
一夢に見えつうつゝに馴れつ、あ笑止とさらぬ面影や
一閨にさへならぬ、月にはとても、あら鈍なお人や
一山の端にこそ月はあれ、戀の道には月もなや
一夢の浮世の露の命の、わざくれ成次第よの、身は成次第よの
一色よき花の匂ひのないは、うつくし君の情ないよの
一月の夜にさへ來ぬ人を、なか〜待たじ雨の夜に
一ひとりも行きね、ふたりも行く、殘りとどまれと思ふ人も行きね
一目には見て手には取られぬ月のうちの、桂の如き君にぞありける
一來ぬ人をまつの葉に降る白雪の、消えこそかへれ消えこそかへれ
一とはれぬ程は曇らば曇れ、つひにうつさん袖の月影
一思はど思へ恨めしのふりや、報の早き世にありながら

わざくれ―まゝよ
目には見て―伊勢物語の歌

一日ぐれ〳〵にかどに立ち見てけり、君をよそながら
一咲く花も千よ九重八重櫻、何ぞ我身のひとはな心
一よそのつらさを見ればこそ君のお情の思ひ知らるれ
一逢ひも見もせぬ咎もなき我に、恪氣めさるゝ、鐘打たうかのそなたに
一逢はぬ程こそ頼みなれ、今朝の別れの、あ物憂や
一君ゆゑにかゝる憂名の立田山、もみぢ葉よ只色にでて
一夢になりとも情はよいが、人のつらさを聞くもいや
一君ゆゑならば雪の野に寢よゝ、よしや此身は消ゆるとも
一いやとおしやるも頼みあり、青柳よりも雪をれの松
一富士や淺間も何ならん、君思ひ寢の胸のけぶりは
一底は打解けてうはの空するふりは猶いとをしい
一君は月思ひ明石のうらみねは、すまの浦波須磨の浦

鐘打たう―仕馴れたる業をはたとやむる事をいふ、佛家の儀式の合圖より起りし語なり

うらみね―怨嵯、浦見れ

一只置いて霜に打たせよとかいの、夜ふけて來たが憎い程に
一思ひよらずの腹立て顔や、怨みは數々そなたよりこそあるものを
一叩く妻戸はあけゝるせで、まづは明けたよ、ほの〴〵と明けた
一數ならぬ身には思ひのなかれかし、人なみ〳〵に物思ふ
一八島の磯の荒波かそなたは、寄せつ打ちのけ物思はする
一ぬれてこそ歸るらう君は朝露に、我袂もかわかぬものを
一鳥と鐘とは思ひの種よ、とは思へども人によりけり
一ふりよき君の情のないは、冴えゆく月にかゝる叢雲
一逢ふまでの命もがなと思ひしに、くやしや君のつらければ
一すみかとて柴のいほりもなつかしや、都なれども旅は憂いもの
一後生を願ひうき世もめされ、朝顔の花の露よりあだな身を
一心なしとはそれけよ、冴えた月夜に黑小袖

只置いて―此唄閑吟集にあり

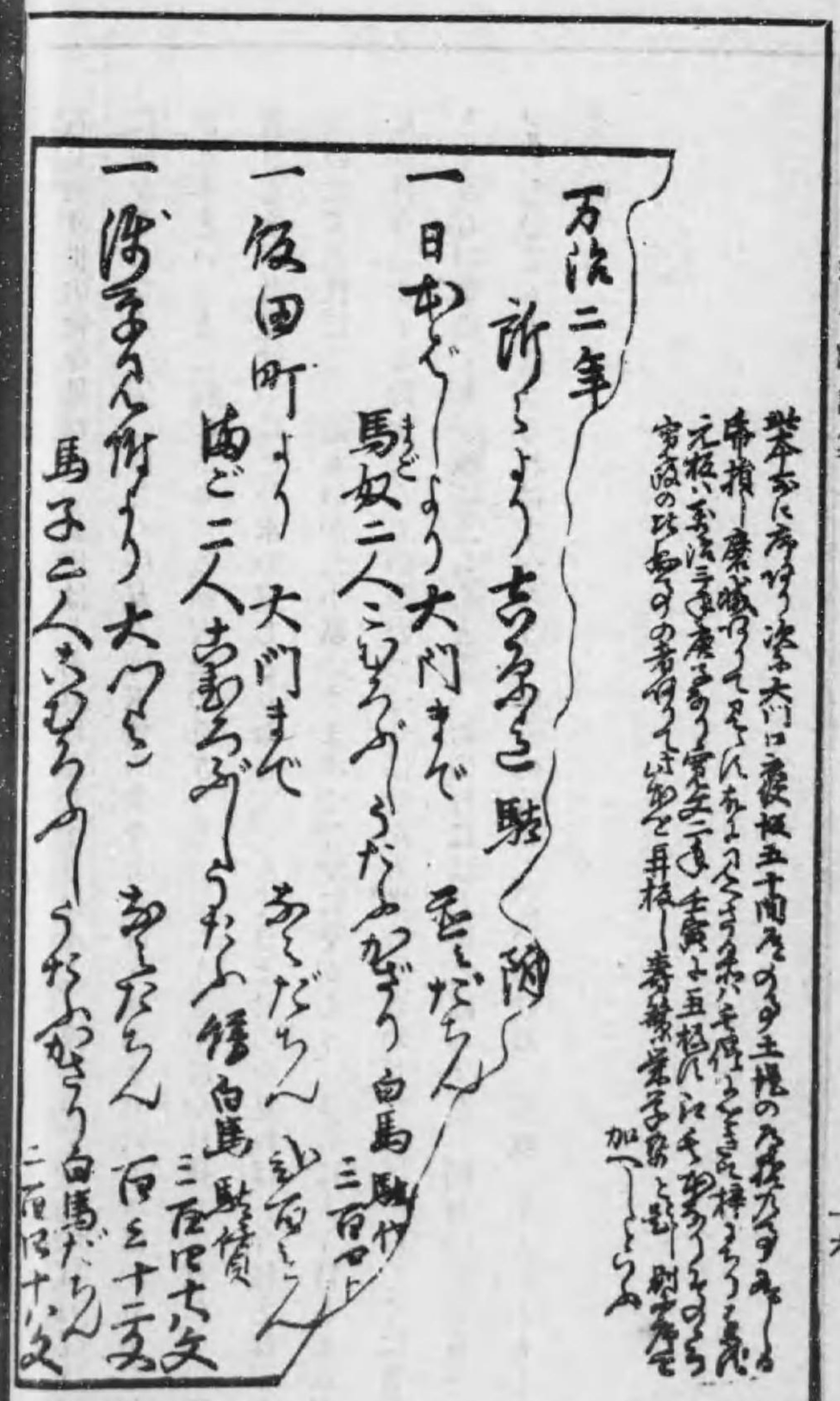
そなたよりこそ―そなたより此方にこそ怨みはあれ

うき世もめされ―浮世狂ひ即ち色遊びもせよと也

文祿二年八月日

自庵隆達

石上古き世の物を見れば、其比はとありけんかゝりけんと、萬の事どもしのばれてすゞろにゆかしくなん、爰に同じ心の友人琢玉齋の翁今より百とせあまり六十年ばかりあなた萬治三年といふとし板にゑりたる新吉原のゑざうしの、たまさかにやれ殘りて友だちのひめ置きしを、此度せちに乞ひ求め寫しとりぬとて、もてきませるを見れば、今樣とは事かはりいたく古代にて、遊女のかた小歌のさまみやびかにをかしう、さらに〳〵目とまる双紙なりけり、かゝる珍かなるものをいたづらにせんも惜らしきわざなれば、同じくは昔慕ふともがらの爲に、再び板にゑらんとて、おのれにはし書乞はるゝを、稲舟のといらへつれど、しひてもよほさるればすべなう、聊その故よしかいつけぬ、文政二年といふとしの彌生のはじめ



古代

よし原小歌鹿の子

吉原はやり小歌そうまくり

さかなばうたづくし

一ゆくすゑ廣き武藏野の、廣き惠みのくをりなれや
一槇の戸よりて明石の月を見つ人心、天津乙女のへだてなく、思ひ思はず物がたり、長き夜すがら幾秋も
一くるくくとめぐり合ひ、はやよのさまにいつか逢瀨の浪枕
一あめが下皆うるほひて、二葉の松もはえそへて、千代の初めにくく
一君が世の久よかるべきためよにも、かねてぞ植ゑよ住よこの松
一山鳥たれを恨みて墨染に、淺き契に相馴れそめて、中々今は中々に
一人買舟かうらめしや、とても賣らるゝ身ぢや程に、靜に漕ぎやれかんたどの

よのさきーかのさきの誤なるべし

久よ、ためよ、植ゑよ—いづれも「よ」は「し」の衍、詞花集「君が代の久しかるべき例にや神も植ゑけん住吉の松」住よこ—住よし

の誤かんたどの―かんどり（梶取）殿の意か、閑吟集には「人買舟は沖をこぐとても賣らるゝ身を只靜にこげ上船頭殿」とあり

あの君さま―此唄「梨の木育ちゆすれど落ちぬ梨の木よ」の誤か

ましーぶしの誤なるべし

あちし―近江の誤か、近江菅笠は名産也

笠もて―笠買ての誤か

一昔見し月の光をしるべにて、今宵や君西にゆくらん
一淺き契に相馴れそめて、中々今はすむまじきぞ我心
一あの君さまに久しうて見れど、白玉椿色も變らぬよ
一あの君さまはなめの木の育ちゆなれど、落ちぬめなしの木よ
一情の花は逢ふ時ばかり、別れになれば萎れ萎るゝ
一昔も今も戀する人は、身につまされていとしう御座るよの
一十五や六の座敷のかざり、芍藥牡丹庭のかざりよの

あふみかはりまし

一これから見れば上野が見ゆる、湯島淺草隅田川、あらしにつどく笠もてたもれ、上野

編笠を

れんぼのかはり

一君は五月雨おもはせぶりや、いとど焦るゝ身は浮舟の、浪にゆられて島磯千鳥、れん

れんれゝれつれ―はやし詞

れんぼ―戀慕

背戸や―やは接尾辭

一節切―一夜限にかけていふ

いのたけ―心のたけの誤なるべし

けうとげ―氣疎氣にて淺ましやの意

れゝれつれ

一ゆふべ〳〵に身は淺草の、露を踏みわけあの吉原に、しどろもどろと君ゆゑ迷ふ、れんぼれゝれつれ

ひとよぎり

一吉野の山を雪かと見れば、雪ではあらで、これの花の、吹雪よの、これの
一なれ〳〵茄子背戸やの茄子、ならねば嫁の、これの嫁の名の立つに、これの
一君があそばす尺八を、其名は誰かつけつらん、一節切とうらめしや、千代萬代のよをこめて、いのたけはかはるなよ、ふしぐゝなれば、名の立つに〳〵

夢の通路ひらくくずし

一人の身を露の命といふ事は、終には野邊におけばなれ、百の媚ある姿をば、けうとげ野らに捨てられて、骸は浮世にとまれども、こんな冥途に行く道の、あらさびし此旅の空、誰に問はまし道芝の、露か涙かうらめしや、とは思へども二世かねたるしるし

おさとさがみつけ

うハてをとる
さんやりを

ともうけへ―誤字あるべし
なほすな―直すのは
たへかいちかいに―互ひちがひにの意か
おもはく―情人
なきこの酒―なさけの酒の誤か

には、憂きもつらきも君とわれ、同じ冥途の苦みは、ともうけへはうらめしや

ほそりづくし

一ほそりのやれ出所は大和の壺坂、その節なほすな美濃の谷汲、おしやれば誠にのうさて美濃の谷汲

一われも他國よ、貴所さまも又他國よ、たへかいちかいに、のうさてお目をくださありよ、おしやれば誠にのうさてお目をくださりよ

一城の御門で今朝見た又若衆は、筆がな墨がな、のうさて硯紙がな、繪に書き寫して、のうさて國の土産に、おしやれば誠に、のうさて國の土産に

れんぼのきぬた

一あはれなるかな人々は、勤も今はうかゝと、只いたづらになり給ふ、ある夕暮の事なりしに、あまり彼の方戀しさに、いざやそもじをおもはくと名づけて一夜あかさんと、傍輩ながらたはぶれて、なきこの酒と名づけつゝ、さいつさゝれつ諸共に、くどき事こそいたはしけれ、いつかがやうに彼の方と、一夜なりともわがまゝになさば、

いて見給へ―往て見給へ
しばたちいて―しばしたちいての誤か
そさむ―前にそみんとあり、原本のまゝ
かそみん―かのそみんの誤か
薄雲―遊女の名
茶―同前

などかは今の思ひは有明の、月まつ程のうたゝ寢も、ならぬ此身はそもいかに、いつの世の報いぞや、とは思へども御身と我身がはらずば、末は逢瀬となるべしと、思ふ心をたよりにて、少しの憂きを凌ぎけり、かゝる所にいづくともなく、物音高く聞えしは、もしも籬の音なるか、いて見給へとありしかば、しばたちいで其方のかたを眺むれば、砧の音こそ聞えける、げにや我身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ふぞや、唐土にそみんといつし人は、胡國とやらんに捨ておかれしが、故里にとゞめ置きたる忍び妻、そさむの寢覺を思ひやり、高樓に登つて砧を打つ、思ひの末の通りけるか、萬里の外なるかそみんが方に、故里の砧聞えけり、それゆゑ憂きをも凌ぐかなればば、わらはも思ひや通らんと、とても淋しきくれはどり、綾の衣を砧に打ち、少しの思ひを晴らさんと、薄雲きぬを取り出だし、いざ〳〵砧うたんとて、馴れてふすまの床の上、涙かたしく狹筵に、紫たちより諸共に、怨みの砧うつとかや

きたりて—來と
著とにかく
問ふべきと—問
ふべきぞの衍か

きぬたのまき歌淨瑠璃

一衣におつる松の聲、夜さむを風や散らすらん、おとづれの〳〵稀なる中の秋風に、憂きを知らする夕かな、面白のをりからや、頃しも秋の夕つかた、小鹿の聲も物すごし、見ぬ秋風を送り來て、梢はいづれ一葉散る、空すさまじき月影の、軒の葱にうつろひて、露の玉だれかゝる身の、思ひをのぶる夜もすがら、嵐の音を殘すなよ、今の砧の聲そへて、君がそなたに吹けや風、あまりに吹きて松風よ（れいぜい節）わが心通ひて人に見ゆならば、よその夢ばし守るなよ、破れて後は此衣、たれかきたりて問ふべきと、きて問ふならばいつまでも、衣はたちもかへなん（下歌）夏衣うすき契はいまはしや、君が命は長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣うたうよ、彼の棚機の契には、一夜ばかりのかり衣、天の川波たちへだて、逢瀬かひなき憂き秋の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしほるらん、水かけ草の露ならば、波うちよせようたかたの、その（はうたぶし）文月の曉や、八月九月ゆにまさに、長き夜の〳〵、月の色風けしきまで、砧の音や夜嵐の、悲みの聲虫の音の、まじりて落つる露涙、ほろ〳〵はら〳〵といづれ砧の、聲やらん〳〵

かへろう—鹿の鳴聲「かへろ」に「歸ろう」をかく

えい—感詞

かはり伊勢ぶし

一我庵は都の巽しかぞすむ、世をうぢ山と、えい人はいふなり喜撰法師よ

ひきよく

一天下泰平長久に、治る峯の松風、雛鶴はちとせふる、谷の流に龜遊ぶ
一桐壺の更衣の、比翼連理の契も、定めなき世の習ひとて、夢のうちぞ悲しき
一たそや此夜中にまぎれ、板戸を叩くは、雲井の雁がねか、水雞の告ぐる聲々
一うらめしき我緣、薄雪の契か、消えにし人の形見とて、涙ばかりや殘るらん
一行き暮れて旅の道、うらぞ淋しき浪の音、かへろうと鹿の鳴く聲に、我も夜すがら泣きあかす
一武藏の野邊に月の出づべき山もなし、町よりいでて町にこそ入れの

一行平の事を松風に問へば、村雨ごとに涙ばかりよの

一あの君さまは稲荷の紅葉、色薄けれどはまに深草の、見れば心も消えぐ〳〵と

はまに―たまに（偶）の衍か

すゞむし

一うらめしの鈴虫松虫、鳴くべき原では鳴きもせで、君さまとわれとの間を、きれんやきれ、あんれきれきれ、ちんからころりと鳴くのにくさよ

うらみ―恨、裏見

葛の葉

一我戀は葛の裏葉のきりぐ〳〵す、うらみては鳴きうらみては鳴く

人目の關

一思へども人目の關にとめられて、心ばかり通ひきぬらん

坊の津

一名の立つをしさに出て見れば、庭の雪に跡あり、これこそ形見よ、雪消えな〳〵

一坊の津の中の妹背はかはるとも、君もかはらじ我もかはらじ

かたばちかはりぶし

一一方ならぬ思ひをすれば、枕もきけよ夜こそ寢られね

一さす盃は三世の機縁、二世まで契るさすぞ盃

一短夜の月よ、語りも足らぬ山時鳥、初音こひしや

一あこがれて我はさきよの花よ、情に一夜宿をかるかや

きよ―ききよう（桔梗）の衍か

一夢の間の浮世死んではいらぬ、お情あらば命あるうちに

一あらなつかしの松虫の聲や、聲きくたびにおりん戀しや

一つれなき君に相馴れそめて、浮名は龍田思ひふるくさ

一怨みのあるも思ひのあまり、思はぬ君には怨みなやつらや

ふるくさ―深草の衍かるべし

一空飛ぶ雁は常磐へ行くか、我等も故郷都戀しや

常磐―常世の訛か

一破れた橋は渡るが大事、主あるきさまを引くが大事よ

一寺々の鐘は撞きても鳴るが、緣つきぬればならぬものかな

一見れば見渡す棹さしやとどく、なぜに我戀とどかぬぞ
一聲は聞けども姿は見えじ、君はふかみのきりぐ〜す

ふかみ—ふかの（深野）の衍、山家島虫歌にも此唄あり

雲井のろうさい

一文はやりたし我身は書かず、物をゆへかし白紙が
一思ひ捨つるな叶はぬとても、緣と浮世は末を待て
一花は散りても又春咲くが、君と我とは一さかり

吉原名よせ　たぶのり

一花を吉野と見る人の、戀路に迷ふ三谷のはて、情に思ひ染川や、末を高瀬と聞くから
に、同じ初瀬の浪枕、君もろともに因幡山、松が枝花の藤波や、河内八橋をりを得て、
われは思ひにやせわたる、わかれ〳〵和泉の玉川や、されば千手の誓にも、枯れたる木
にも花さきや、若狭は二度となきものをと、何歎くらん思ひあかしやと、御利生ある
こそ嬉しけれ、めては若山せいしゆの君、げにや誠に痴話事の、ころは吉田のなりの

吉野、染川、高瀬、初瀬、因幡、松が枝、藤波、河内、八橋、和泉、玉川、千手、花さき、若狭、あかしゆ（丹州也、あかしやは衍なるべし）利生、若山、せいしゆ（勢州）、吉田—いづれも遊女の名

定家、家隆、玉葛、西尾、薄雲、紅葉（高尾をいふ）、對馬、生田、坂田、萬よ、千よ、初山、清原、たのむ、まさつね、こよし—遊女の名

末、心の定家家隆のもとに行き、日頃手馴れしはやり歌、參らせ上させ給ふにより、
三味線などにのせられて、ながうた貫く玉葛、掛けてぞ賴むと思ひしに、西を高瀬に
薄雲や、さこそ紅葉出ぬらんあゝ面白や、こがれこがるゝ對馬せんじゆ、生田坂田の
かりぶしも、寢られぬまゝに辿り行き、萬よ千よもかはらじと、夜毎に通ふ初山の、
心清原賴むとて、まさつねならぬ我思ひ、こよしのよしある戀衣

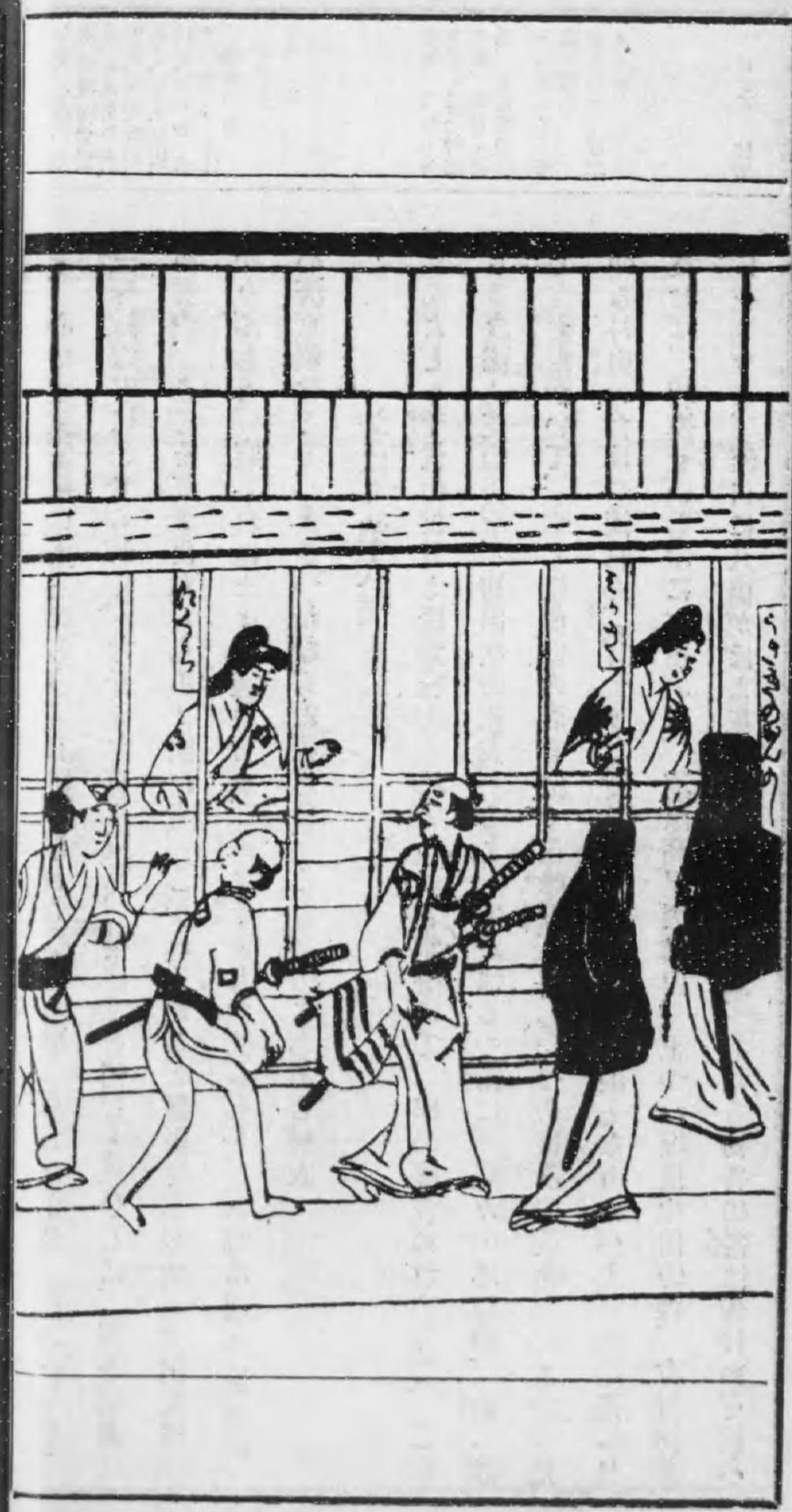
常磐、こむらさき、やしほ、外山、相摸、初音—同前、前條參照

わがかいて—若楓の誤かぬしかづ—誤字あるか

かはり美人揃

一まんよとも千代の世長し松が枝の、緣のわかさ常磐にて、岸の藤波ぬれ〳〵て、こむ
らさき添ふ花の香を、初山吹の花衣、こよしのかはる一節に、籬々の忍び戀、敵に語
るなわがかいて、やしほ山いろおもはく三味線、ぬしかづの恨みの玉葛、たまかに見
ゆる外山のだけや流れん、和泉なる深き姿玉川や、高瀬の浪となりぬべし、西を遙に見
渡せば、相摸せいしゆに吉田の里、清原高尾因幡山、正つね坂田生田の森、吉野初瀬
に花さきよ、河内に八橋かほよ花、花のさそふ時鳥、あたら初音の咎は告げぬぞ恨み

かほよ花—杜若



なり、漕がばいざ〳〵、漕がば浮れん對馬舟、浮れて三谷に著きにけり
一源氏狹衣あやめもいやよ、君の姿を花と見る
一君は照る日かわりや降る雪か、見れば心の消えぐ〳〵と
一思ひだす夜は枕と語ろ、枕ものゆへ焦るゝに
一表みじかの更紗の小袖、うらみながらも著ておよれ
一枕屏風に書きおく程に、戀しかろ時や起きて見よ、
一すゝぐまいもの形見の小袖、馴れし昔が薄くなる
一神や佛を恨むは輪廻、過去の因果よ是非もなや
一君を見たさに行きてはかへり、何の因果の末ぢややら
一夢に見てさへそさまの事を、はらと泣いては消えぐ〳〵と
一逢うた其夜の明六つ鐘を、まつりかへたや暮六つに

かぶろおもはく踊

わりや―我は
およれ―御寢あれ
そさま―そなたさま
はらと泣いて―はら〳〵と涙をこぼし泣く

一思ひ別るゝ其曉は、烏もはら〳〵われも泣く
一涙で疊る今宵の月は、思ひし山の晴れやらず
一袖の振合せさへ多生の縁と聞くに、況や枕を並べて打解けておいて、思ひし事を今語らいで、又も逢瀨は不慮でそろ
一月日かけて變らじと契りし中を、くやしや增す花あれば、見捨らるゝ
一浮世にうつろひ易き君は恨みぬ、數ならぬ身ぞうらめしき
一嵐の外の友呼ぶ千鳥、君呼び返せ小夜ふけぬまに
一年たけて見るも二世までの契、幾千代なれや小夜の中山

多生の縁―多生曠劫以前よりの因緣
不慮でそろ―豫期し難く候

かはりぬめり歌

一君が來ぬにて枕な投げそ、投げそ枕に科もなや
一狩場の鹿は明日をも知らぬ、たはぶれ遊べ夢の浮世に
一ちはやふる神の前での鈴の音、神樂少女のさつ〳〵の聲

來ぬにて―來ぬとての誤なるべし

見ぬまでも―見ぬまではの誤かたれ始めし―此唄隆達小唄を二首連結せし也

しば―柴垣の誤なるべし

すゝぐまいもの―此歌重出

てんと―天道にて誓詞也

ゆひ立て―言ひたて、結立

一衣紋つくひ通へども、相見る事は程を經て、逢ふは優曇華嬉しやな

一見ぬまでも夢うつゝとも思ひしに、今見こがるゝそもじ故かな

一たれ始めし戀の道、いかなる人も踏み迷ふ、秋の夜もはや明けやすや、獨ぬる夜の長の夏の夜や

一名にも似ず白波たてるすみだ川、見ても見飽かぬ吉野櫻

一未生以前が遙にましぢや、何の因果にしばへ來て

一すゝぐまいもの形見の小袖、馴れし昔がうすくなる

一てんと八幡此上からは、立つや浮名は無にせまい

一うつゝか夢か幻の身をもちながら、遊べや歌へ酒飲みて

一浮世に住めば思ひの增すに、月と入ろやれ山の端に

一ちらり〳〵と花めづらしき、雪の振袖ちらと見そめしより、今は思ひの種となる

一菊のませ垣ゆひ立てられて、今はなか〳〵すいられぬ

誤ぬ―られすい字あるべし

右此歌は直之以正本令板行者也

我友丈河ぬし年來ひめ置かれたりける吉原小歌總まくりといふ册子を見れば、まづ客人の廓通のところを初めて、うかれめの座敷のかた、はた其比の小歌をさへ書きまぜて、それがはしに萬治三年とあり、其古雅なる事いふべくもあらず、抑〻吉原町の傀儡屋はいぬる文祿慶長のころほひ此大江戸の大城ちかくところ〴〵に在りけるを、庄司何がしといひし人おほやけにねぎ奉りて、元和三年といふ年堺町の下つかたへ彼のくゞつ屋を一つにつどへ移して葭原町とぞいひける、此時葭の字を吉の字に書き改めたりといへり、其後明暦丁酉軻遇突智神のあらびありし年また千束の龍泉寺村へ移されて、はじめて新吉原町となんいひける、かくて此册子に萬治三年とあれば、今の新吉原町いできはじめて僅に四年といふとしの刊行なりけり、されば此年文政二年まで凡百六十年に及べり、其風俗の質素小歌の古雅なる事誠に今の世のさまとは異にして珍しともめづらかなりかし、かゝる惜しき册子をいたづらに紙魚の棲となさん事いとくちをしきわざなれば、丈河ぬしと謀りて、いさか落字をも補はず訛字をも正さずありつるまゝに謄寫して、再び櫻木にはゑりぬ、只おのれが本意はふるきを後に傳へん事を思ふのみなん

琢玉齋主人しるす

山家鳥虫歌

山家鳥虫歌序

夫仁は心の德五倫は常の道にて、此世の中にある人ごとに是を亂すは人といふべけんや、かくありて事の繁き中見る事聞く事につけ言ひ出せる山々里々に稻刈り麥搗くことわざ聲おもしろく諷ひなす賤の女の一節、いかなる故の心にやあらんと耳をかたぶけても、其心分ちがたく、故に尋ねて筆にしるし、其風俗を見れば幾千世と君を祝ひ身にすぎ樂みの餘り、荒れたる家にむぐら這ひかゝり、よもぎなど高く生ひたる庭にたくはへ置きし籾を取りいで、あやしきさましたる女ども化粧して、をのこと共に臼挽歌うたひ、心地よげに疲れをばらさんとて、かたへの牛飼ひ所に休み、煙草のむ間に茶うけと名づけ、こき茶に熬米を入れてをさな子ども持ち運ぶ有樣、瓢簞屢空し顏淵の樂みと思ひ出られて、あはれに思はるゝ其言の葉、たが言ひなしたらんも知らず　世の風俗として花になく鶯水にすむ蛙の聲、いづれか歌をよまざらんと古事にあるよしして、山家鳥虫歌と名づけて、その所々の國風もしらるべきやと集むるもの也。

明和八辛卯冬　　天中原長常南山序

山家鳥虫歌　目錄

卷之上　本朝　三十箇國
卷之下　同　三十八箇國

御じやうらく―御上洛、寛永三年秀忠上洛の時の歌なり
はんじよ―繁昌

山家鳥虫歌　卷之上

山城國風

▲めでた〳〵の若松さまよ、枝も榮える葉もしげる
▲ことし御じやうらく、うへさまはんじよ、花の都は猶はんじよ
▲稻は刈り取る穗に穗がさいて、どこに寢さしよぞ親ふたり
▲親子つまとも田を植ゑしまひ、神に千歲のたねをまつ
▲こいとたがいうた笹原こえて、露に小松は皆ぬれた
▲ござる其夜はいとひはせねど、くるがつもれば浮名たつ
▲わしは小池の鯉鮒なれど、なまづ男はいやでそろ
▲忍ぶ道には粟黍うゑな、あはず戻ればきびわるい

黒日―暦に黒點を付するより俗に黒日といふ受死日と稱して大凶日なりとす

幾世長かれ―此歌誤脱るべし

さつき野―五月頃の野邊―かきはなげかけ―釣を投げかけの訓なるべし

▲こなた思へば千里も一里、あはずもどれば一里が千里

▲いとま下され後日は待たぬ、あすは黒日で日がわるい

▲戀にこがれて鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢が身を焦す

▲飲みやれ大黒歌やれ蛭子、殊にお酌は福の神

▲幾世長かれ此殿のめぐみ育ちて若榮つむ

▲さまはさんやで宵々ござる、せめて一夜はありあけに

▲高い山には霞がかゝる、わしはこなたに目がかゝる

▲繻子の袴の襞とるよりも、さまの機嫌のとりにくさ

▲舟は出て行く帆かけて走る、茶屋のをなごは出て招く

▲招けど磯へよらばこそ、思ひ切れとの風が吹く

▲さまの寢姿けさこそ見たれ、さつき野に咲く百合の花

▲かきはなげかけゆすらば落ちよ、心つれなや山桃よ

秋の出―鳥羽の名所

圖に出す―原本黒木と櫻の枝とを畫きたる盃の圖あり、略之

▲こなた思へば野もせも山も藪も林も知らで來た

▲いとしとのごの目元のしほを、入れてもちたや鼻紙に

▲こひといふ字がありやこそきたれ、鳥羽の戀塚秋の山

▲さてもよい子や黒木賣のむすめ、戀の重荷かかつぎつれ

▲山にさく花あらしが毒よ、わしは君さま見るが毒

凡二十五首

君を松にたとへ千代萬代まで榮え給へと祈りし賤の女の心ばへ、又は豐年の貢を祝ひ、妻子おくにのるの心、孝弟の道まなばずして人情感ずべき事なり、他の國にすぐれ水清く男女ともに色白く詞おのづからわかれて滯りなし、孝弟の道は國々同じといへども記すにいとまなし、五畿内の外は大概をのぶる、此國に大原盃といふあり圖に出す、東山殿時代此盃出來、蒔繪小原木のもやう故大原と申す由、それより後色々形を變ずる

おはら木やめせ〳〵黒木さゝをめせ
こくも薄くもきこしめせ〳〵

栗本駿河家に形有之

大和

▲千代の松がえ三笠の森に、朝日かすがのみかげまつ
▲さまのいとまのすひつけ烟草、戀がますやら火がつかぬ
▲梅と櫻と吉野へいたら、梅はすいとて戻された
▲東山のは雪ではないか、あれが雪かやさくらばな
▲一に當麻の糸掛ざくら、奈良の都は八重櫻
▲ござれそめたらさま來そめたら、道の小草も枯るゝほど
▲よしの川には住むかよ鮎が、わしが胸には戀がすむ

戀—鯉にかゝ

▲わしはやまがら餌におとされて、明障子のうちにすむ
▲人に物いや油のしづく、落ちてひろがるどこまでも
▲わかいをんなの願かけるのは、神や佛もをかしかろ
▲さまにうらみは三島のこゆみ、いうてなにしよに添はぬから
▲花のさかりをこなたでしまうた、どこをさかりとくらそやら
▲ゆうべ呼んだる花嫁御、けさは無間の鐘をつく
▲花は一枝折手はふたり、わしはどちらへ靡こやら
▲ひとり山道ものすごござる、早く聲だせほとゝぎす
▲なさけないぞやけさ立つ霧は、かへる姿を見せもせで
▲雉のめんどりすゝきのもとで、つまを尋ねてほろゝうつ
▲月夜かげにもほしたい袖を、ぬらしたよ又しほるほど
▲さまよあれ見よあの雲ゆきを、さまと別れもあのごとく

こゆみ—暦の誤

なさけないぞや—隆達小唄に同意のものあり

▲思ひなほしは無いかよさまよ、鳥は古巣へかへらぬか
▲人目おもはず人さへいはにや、織りてきしよぞやたつ縞を
▲そうて添ひ飽くとのごもあるに、添はで思ひのますもあり
▲お月さまさへこひぞよめさる、こゝで待てとの雲かげに
▲蝶よこてふよ菜の葉にとまれ、とまりや名がたつ浮名たつ
▲はやるかんざし髪かたちより、すぐな心がうつくしい

心のまゝ―心のまことの衍か

凡二十五首

山々里々にていひならはすことわざ世の人情父を慕ひ君を敬ひ、宮仕への賤の女なれば主を思ひ子をしたひつまを親む心のまゝやさしくも感ずべき事也、此國に大峯といふ深山あり、昔遠江國長福寺へ山伏來り、大峯へ入る路用の合力を得んといふ、かねといふは鐘樓より外はなし、路用にたゝば參らせんといふ、客僧喜び、鐘をさげて走りゆき釋迦が嶽の松にかけ置て今に存すといふいぶかし、しかれどもかやうの事いにしへありし事也、漢の武帝の御時未央殿の鐘故なくしてみづから鳴ることあり三日夜までやむ事なし、帝驚かせ給ひしに、東方朔奏しけるは、銅は山の子にして山は銅の母と承る、陰陽の氣類をいへば、子と母とは相感ずべし、山くづるゝ所ありなんと申しけるに、三日のうちに南郡の山くづるゝ事三十餘里とぞ奏しける、今も人家の釜鳴ることあるは此理にてぞ侍る、是等の理をよく通じなば其一氣の感ずる所は百世と雖も遠からざる事をしるべしと鬼神論に出たり、山伏の鐘を山上へ持ちゆくこと、東方朔に尋ねたらばいかゞ答へん

あらぬかぎり云云―あらんかぎりは朽ちもせぬの亂　世の中―豐作

河内

▲君は八千代にいはふね神の、あらぬかぎりは朽ちもせん
▲ことし世の中稻刈りそめて、神と君とにかさね餅
▲山家なれどもわがふるさとは、柴のいほりもなつかしや
▲山家々々とあしげにいやる、色のよい花山に咲く

▲親がかたおや御座らぬゆゑに、人もあなづりや身もやせる
▲人はけなりや咲く花なれど、われは木蔭のしをれぐさ
▲さまとわしとは山吹そだち、花はさけども實はのらぬ
▲富士の裾野のひともとすゝき、いつか穂にでて亂れあふ
▲人がいひますこなたの事を、梅やさくらのとりぐ〳〵に
▲人のいひなし北山時雨、曇なき身は晴れてのく
▲わしは谷水でごとは出たが、岩にせかれておちあはぬ
▲何をなけくぞ川ばた柳、水の出ばなを歎くかや
▲さつき雨ほど戀ひしのばれて、今は秋田のおとし水
▲梅はにほひよ櫻は花よ、人は心よふりいらぬ
▲雨のふりでに名か立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ
▲おもしろいぞや今さく花は、のちの散りばは知らねども

けなりや―淡しや
でごと―出ることの衍か
ふりで―降出
散りば―散りぎは

▲人の事かと立ちより聞けば、きけばよしないわしがこと
▲阿波の鳴戸に身はしづむとも　君の事ならそむくまい
▲こひの山吹なさけのあやめ、秋の枯草しをれぐさ
▲さまとわしとはうちごみやなぎ、浮けど沈めどもろともに
▲思うてこひして叶はぬ時は、稻の葉むすびして見やれ
▲こなた思うたら是程やせた、ふたへまはりがみへまはる
▲一夜おつるはよもやすけれど、身より大事の名がをしい
▲いとまぢやというて挿櫛くれた、心とけとのときぐしを
▲あきもあかれもせぬ中なれど、いとまやります親ゆゑに
▲鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る

うちごみやなぎ―打込築よの誤か
一夜おつるは―「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たん名こそ惜しけれ」の意

凡二十六首

君を敬ひ豐年を祝し、神に祈りて安穩を願ひ、貧しきうちに樂みあはれに聞ゆる、

樂みは―此歌「樂みは夕顔棚の下涼み男はてくら云々」といふが普通なり

はるの松が枝―濱の松が枝の誤か

をし鳥―唖にかけていふ

古歌に樂みははまのひさごの夕涼みをつとはてゝら妻はふたのして、御製のよし、男女ともに心やはらかにて詞うつくしくあれども、國の癖としてことをはかる心多しといふ、大和河内の境に二上山といふあり、麓に雲母多くあり、雲母は水氣にて此山に霧たちのぼりて雲合へば雨ふる故に、二上山に雲集れば雨ふると所の者いふは陰陽相和し同氣求むる故なり、雲母と書くは此故なり、相感ずる事は前にいづる

和泉

▲千とせにあまるしるしとて、君が世をへるはるの松がえ
▲こなた百までわしや九十九まで、髪に白髪のはゆるまで
▲ひよ〳〵と鳴くは鵯、鳴かぬは池の友にをし鳥つれてゆく
▲七つさがりて田の草とれば、のばの露かや涙かや
▲聲はすれども姿は見えぬ、君はみやまのきりぐす
▲さまはけなりや細糸つむぐ、わしは山家のふしつむぐ

人はわるないわ―此唄隆達小唄にもあり

のばた―野端か

たがへす―辯す

▲人はわるないわが身がわるい、やぶれ車でわがわるい
▲朝はあさぼし夜はまた夜ほし、晝はのばたの水をくむ
▲風がものいやことづてしよもの、風は諸國を吹きまはる
▲をつとたがへす娘はかせぐ、妻はせどへ出て米かしぐ
▲嫁をかはいがれ嫁こそかゝれ、むすめ他國の人の嫁
▲紅葉ふむ鹿にくいといへど、戀の文かく筆となる
▲尋ねてござれ戀しくば、わしは信田の森にすむ
▲月夜うたてや闇ならよかろ、待たぬ夜にきてかどにたつ
▲さまに貰うた根付のかゞみ、見れば戀ますおもひ增す
▲後世をねがやれぢさまやばさま、年寄こいとの鳥がなく
▲落ちよ〳〵とおとそとしやる、猿の木のぼり落ちやせまい
▲お前ついしよが人事いふか、お茶をあらしに又來たか

お前ついしよ―人前ばかりの追從

お茶をあらしに―茶を貪り飲まん爲に

▲松が殿御で子をうめばこそ、山に小松がたえませぬ

▲嫁を〳〵とゑと謂りやんな、謂る我子も人のよめ

▲むかし思へば恨めしござる、なぜにむかしは今ないぞ

ゑとーえつと又はやつとなどの意にて甚しくの意

凡二十一首

長き世の松を慕ひ豐年を喜び、友白髪の有樣池のをし鳥の睦じきを眺め、うれしき世にあふ事は、淀の流れの車たえせぬ古事思ひ出られてをかし、民の風うはべうつくしくおとなしと雖も、實義うすき所といふ、此國堺の寺に白犬あり、勤行の時堂の椽に來り平伏する事年あり、餅を咽につめて死す、和尚憐みて弔ひぬ、或夜僧の夢に彼の犬來りて念佛の功力により、門番人の妻にやどると見しが男子を生めり、出家させ異名を白犬とよぶ、やすからず思ひて和尚に問ふ、餅を嫌ふ故にといへば、然らば食すべしといひて　用ある體にて座を去り行方しらずとなり、佛說に過去現在の事をいふ、天地の間一元氣にして五行あつまりて物を生ず、死しては散じ散じては集る、前生は人あるひは犬猿のれいとかたよりありて、生をかへんや、かくあれば天地生々してやまざる事はいかならん

攝津

よてーよくて

▲ことし世がよて穗に穗がさいて、殿も百姓もうれしかろ

▲おやはこの世の油のひかり、親がござらにやひかりない

▲人はけなりや親さまふたり、わしは入日の親ひとり

▲親といふ字を繪にかいてなりと、肌のまもりと拜みたや

▲歌のかへしは二度こそかへせ、三度かへすはいなものよ

▲山を通ればいばらがとめる、いばら放しやれ日が暮れる

▲いとしかはい子に旅させ親よ、ういもつらいも旅でしる

▲心短氣でわしや國をでて、今は習はぬ職をする

はんきをなごー半季風の女

▲はんきをなごに心をおきやれ、どこのいづくでかたろやら

▲腹の立つとき裏に川ほしや、水に心をすゝぎたや
▲鳥も通はぬみやまの奥に、すめば都ぢやのよ殿よ
▲野でも山でもお主さまよかれ、お主のおかげで世に出づる
▲物をいやるないやくづになる、いはで包めばくづもない
▲人をつかはど川の瀬を見やれ、浅い瀬にこそ藻がとまる
▲おれをいふとて隣をおしやる、濱の松風うらをきけ
▲夢になりともあはせてたもれ、夢に浮名は立ちやせまい
▲さまがわるいかわがあしかろか、ねたむ心はすがの根か
▲思うてござるか思はでくるか、おれが心をひいて見るか
▲お臺所のれんじの窓に、月と書いたはまことかや
▲胸でくるしき火はたくけれど、けぶり立たねば人しらぬ
▲雨のふりでに名が立ちそめて、雨はやめども名はやまぬ

いやくづになる—言へば屑になる
うち—浦、裏
れんじ—櫺子

わがいやか—我を厭ふか
たく—穀

▲浮名たゝしてなぜ君はそはぬ、人がさますかわがいやか

凡二十二首

千世を祝ひ孝弟の道ありて言ひ出すこと義に叶うて情ありといへども、國宣み華美を好む故にや、心さま人を怨み身をかこつ事も勢强くをとなしからざる姿あれども、よきにすゝめなしたらば義ある國といふべし、此國東成郡林寺村といふ所に、烏虫の類石の上にとまれば、いたゞき二つにわれて口を開きおとし入れて又もとの如し、蛙の物を呑むに似たり、よつて蛙石といふなり、又河條國金遼山の廟に龜石あり、人食につきぬれば、此石に向ひ禮をなせば飲食悉く出すと、三才圖繪に出たり、蛙石は物をのむ、龜石はこくを吐く、一氣なるによりさもありなん、いぶかしとて或人林寺村へ行き尋ねしに、人家の藪中に蛙石あり、いにしへは口をあけしよし、今は其事なしといへり

伊賀

見ずと―見ずとも
藤―有馬に藤といふ湯女ありて有名なりき

▲千代も長かれこの君の、老木の松は榮えゆく
▲他國へだてゝ海山こえて、見ずと心はかはるまい
▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる
▲咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒がいさめば花がちる
▲をさなじみに離れたをりは、沖の艪櫂が折れたよな
▲ねたらよござる青田の中で、ねたら花さく實ものりて
▲つばめも軒の住家にかへる、君は何故かへらぬぞ
▲見れども見えぬ沖の船、こち吹く空をねやにまつ
▲小石小川に子がすてゝある、ひろうてそだてゝ花がさく

凡九首

伊勢

▲かけてよいのは衣桁に小袖、かけてたもるなうすなさけヤアレヤレ〳〵

わごれ―和御寮
あひに―其間に

▲勤めすりやとてわごれのやうな、やほの酌すりや足もする
▲鳥羽でさく花ヤアレ女郎は大坂の新町にヤアレヤレ〳〵 酒は酒やに茶は茶やにヤアレヤレ〳〵
▲心中しましよか髪きりましよかヤアレ髪ははえもの身は大事ヤアレヤレ〳〵
▲駒のやせたに高荷をつけて是でおりよかよ鈴鹿の山を、しかも月夜か闇の夜に

凡五首

志摩

▲今朝のうの字は嬉しのうの字、きゆるまもなきうのかゞみ
▲思ひ切らしやれもう泣かしやんな、さまの戀路はうすござる
▲曇らば曇れ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし
▲つとめしようとも子もりはいやよ、お主にやしかられ子にやせがまれて、あひに無き名を立てらるゝ
▲顏をけがすはおしろいか、生れながらの山櫻

才の神―道祖神

凡五首

志摩の國いにしへは伊勢と同國なり、伊賀の國風伊勢と同じ、婦人のかたち山城と伊勢を第一とするなり、伊勢のくほたとむく本の間に錢かけ松といふあり、參宮する人此野の長きにあきて、行程何程あると問ふ、里人戯れて豐國野へは十日に餘るといふに呆れて、壹貫文の錢を松が枝にかけて太神宮を拜し、國へ歸る、他の人彼の錢を見るに、蛇のわだかまるやうに思ひ、神靈ありと恐れて取る人なしといふ、此類漢の世に蘆浦といふ所を過ぎし人の何となくわらぐつを樹の枝にかけて過ぐる、あとより來る人又始め過ぎし人の如く掛く、後には幾百といふ事を知らず、何者の戯れにや草鞋大王と名を題して、後には終に御社を立てしと也、これらの類淫祀というて蛇狐狸のたぐひを祭ること和漢とも多くあるなり、父母の氣は卽ち天地の氣にして、人體をうけ得て何ぞ故なき淫祀を敬ふ事やある、國々往來の樹にわらぐつをかけ、才の神というて旅行無難を祈る、此類か

ひさごくづやー瓢を這はせたる草屋

▲萱も刈りたし麥かりとりて、羽織したてゝ親も子も
▲をなごすきなら八丈へ行きやれ、八丈むかしは女護の島
▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすゞみ
▲さんしよ胡椒より辛い物せたい、ならぬ世帶は尙辛い
▲心きよきぞ水鏡みやれ、濁る心はなきものよ
▲江戸にさく花駿河でつぼむ、ことにお江戸は花ざかり

凡六首

國風實義ありさわやかにしてよき風なり、此國中島郡國府の宮に毎年直會祭といふあり、往來の人を一人捕へる故に、其日は外へ出ずといへども、自然ととられる者あり、人形を作りて其人のかはりとして、まな板の上にするゑてかたはらに人を置き、翌朝神前より追ひ放し倒れたる處にもちを納めて塚をつき、其人は我家にかへす、

之を考ふるに昔大蛇ありて人を呑む、いけにへを納むれば外に祟をなさずといふ事ありて、淫祀を祭るあやまちより起りて、後世そのまねをすると思へり、近年は國君の命ありて此祭をとゞめ給ふのよし、大智の君といふべし

三　河

▲さまの心はなぜうすくなる、こゝは八橋かきつばた

▲あかぬ故里ふりすてゝ、たれがためかや君ゆゑに

▲柳の糸にとめられて、かへるもならず子がつなぐ

かへる―歸、蛙

凡三首

遠　江

▲あくればいでて暮るゝまで、身は粉になるかはだかむぎ

▲遠州濱松ひろいやうでせまい、よこに車が二挺たゝぬ

▲君はこがらすわれはまた尾羽をからすのはねばたき

こがらす―小鳥、焦れさす、からす―鳥、枯ら

凡三首

三河遠江とも虚談少く、女もけなげに恥を知る風といふ、大井川による堤の陰に忍びて見れば、鳶の如きもの來り魚をとる、人音すれば去る、俗に木の葉天狗といふ考ふるに夜鷹なるべし、夜川面に出て蝙蝠虫魚などをとる、すべての事我心既に惑ひぬれば神も亦くらし、神くらきが故に物に惑ふ事あり、たとへば目を患へる者の空中の花を見るが如し、これを玄花黒花といふ、孔子曰、人の信ずる所のものは目なり、眼もまた信ずるに足らざる事あるかと宣ひしは、かゝる事にて見あやまつ事多くありと鬼神論に出たり、又晉の禾廣といふもの常に親しく來る人ありしが、久しく怠りて來らざりしを不審に思ひ問ひければ、以前座敷にて酒を飲みたるに、盃の中に蛇の形あらはれる、高位の賜はる物なれば飲みつくす、是より病に犯さるゝ故來る事疎くなるといふ、壁の上に蛇をゑがきたる弓をかけ置きたり、是故の事にてありなんと思ひ、又座敷にて酒を勸め盃に物ありやと問へば、以前の如く蛇あり

といふにつき、そのいはれをいふにより、心晴れて病いえたりと也、心の惑ひより起る事しかり

駿河

▲ことし世がよて思ふやうに叶ふ、親もよろこぶ身も立ちて

▲知つてをれども人にまた問うて、母のさしづで迎ひとれ

▲さまのやうな〳〵瓢簞男川へ流して鯰とかたりや

凡三首

遠州と同じきうち取締りなき風といふ、此國富士へ登る事九里、信州淺間の嶽は凡八里あるといふ事いぶかし、いづれか其山の麓なるや、又は谷峯をこえ行くまがりも知れず、諸國土地の高きありひきゃあり、信州は本朝第一の土地高き所なり、富士海へ近き故山のもととといふ事大概知らるべし、山の本は海より量れば知らるべし、四海くほかなる土地に水たまるを海として、異國本朝高下ひとし、天文書に雖大山

欠

欠人

凡五首

甲斐の國南に富士をおほうて氣こもりするどなり、伊豆の國は氣强くして清き心あり、相摸の國は淫風多き所といふ、武藏の國心廣くおごりの氣ありといふ、此國足立郡大宮の森のうちに黑塚といふありて惡鬼すむ、東光坊といふ山伏鬼を退散せしむるといふ、いにしへは人の來らざる所に塚穴あれば盜賊こもりて、人來れば殺し衣類を剝ぎとる類を鬼といふ、然らざれば山川木石水土の怪に過ぐべからず、山深く水暗く草木おひしげる所は日月の光及ばざれば、陰陽の氣自ら鬱して百怪を生ずる事は、いはゆる蒸してくさびらを生ずるが如し、これらの類に苦めらるゝ事はさくる事を知らず、みづから恐れる所なり、晉の溫嶠といふ人牛渚といふ淵に舟をとどめて此所に水深く集る所と聞きて火をもやして照らすに、さまぐ〜の怪しきもの水に浮み出てにげ去りぬ、深山大澤はかれがいるべき所なるを、人ゆきて之をしづ

ぢぐ
ぢる
ての
姫を

書れ
くも
〻〻
車
ひく

めんに、などか崇をなさゞらんと、張南軒といふものいひけん、ことわりにこそ覺ゆれと、鬼神論に出たり

安房

▲碎けても身はかまはぬぞ、のくならばなぜに我をばおとしたぞ

▲山な白雪朝日にとける、とけて流れて三島へ落ちて、三島女郎衆の化粧水

▲そなた命をすてんというて、今はふたみち山ごしに

山な—山なる

凡三首

上總

▲臼よまはれよまはれよ臼よ、晩の夜びきにまはりあふ

▲岩にせかれて腹たつ波も、心すぐなら波こさん

▲つまは北國(きたぐに)まだかへらぬか、文をやりたし歸るかり

▲おもふ心のまゝならば、ねたむ心はなぜやまぬ

▲むかし見し夢ふりすてゝ、今はむかしの夢こひし

凡五首

下總

▲曇らばくもれ箱根山、はれたとてお江戸が見ゆるでもなし

▲土橋(どばし)板ならよかろもの、どんと踏んでは日をさます

▲さよの中山これではないか、さまについてやろ撞鐘(つきがね)を

凡三首

常陸

▲水戸で名所はせんばの川よ、はすのめごめに鴨がすむサツサオセ〳〵

▲いたこ出島のよれまこも、殿に刈らせてわれさゝぐサツサオセ〳〵

▲いたこ出てから牛堀までは、雨もふらぬに袖しぼるサツサオセ〳〵

▲岩井町とはたが名付けしぞ、かねがなければつらいまちサツサオセ〳〵

め—根の事（旁註）

いたこ、岩井町—遊女町（旁註）

よれまこも—よれもつれたる風

凡四首

安房の國は心するどなり、上總の國安房と同じ、下總の國は上總と同じ、山沼流水多き所なり、常陸の國風氣よろしからず、病をもつて死せざるをほまれとする風なり、此國息栖明神のいそ海に女瓶男瓶といふ二つの石あり　中は素水にてしほの味ひなし、忍鹽井の水といふよし、素水なる事はかろくして湖はおもし、海中きりのほるが如く、彼の石の中の水は砂ごしをするが如し、然れども山上に水あり、海なき國の山に湖の出る所あり、石中に潮わく所あり、これらは山澤氣を通ずる故に、一氣そのまゝ通ずなり

近江

▲年たち返る御代の春、松の縁の千代を待つ

▲伊勢の山田のいまきりたけは、お杉お玉のさゝら竹

▲堅田船頭を夫にはいやよ、月に二十日は沖に住む

湖―二ケ所とも潮の誤なるべし

いまきりたけ―今切り竹か

▲何も職ちやが鞍馬の職は馬に七束我身に二束、馬の手綱を手にひきまとひ花の都へ柴賣りに

▲わしが殿御は明日から江戸へ、足も輕かれ天氣もよかれ、とまり〳〵に女郎なかれ

▲大田原見たか江戸見たか、大田原町はまだ知らぬ、お江戸に弓が千挺立つ、弦引くとのはわがつまか

凡六首

美濃

▲松になりたや有馬の松に、藤にまかれてねとござる

▲淺香山かや山の井の、人の心の底みゆる

▲底の見ゆるはたれが知る、深い中とはみとせまで

▲海がないとや此國に、舟も帆もある高瀬舟

▲高瀬舟には柴をつむ、われは浮名の種をつむ

淺香山云々―「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわがもはなくに」の意

凡五首

近江の國風詞やはらかにして善をえらぶ心あり、美濃の國心やはらかにしてよき風なり、此國月吉村といふ所に長さ一二寸ばかりある薄白き寶貝（はうかい）の如き月糞といふ石あり、同所村田の邊に星糞といふものあり、上天の星は末代かはらず、流星は地中より出づる陽氣にて空へあがり、冷際といふ大寒の所あるにあたり、すれて光を發し落つるものを流星と名づけいふなり、土中の陽なるゆゑ土氣をふくみのぼる、大なる流星は地まで火光とどく、ともし火のしんあるが如く、陽は發し土氣はかたまりて黑き燒石の如くもの地へ落つる、これを星糞といふなれば、岩村に限りてあるとはいぶかし

燒石の如くもの―如きものの誤なるべし

飛驒

▲佐渡と越後は筋向ひ、橋をかきよやれ船橋を

▲橋の下には鵜の鳥が鳴くぞや、何と鳴くエょぶりしやりと

信濃

▲おまんの部屋で鳥せみが鳴くいノゥ何と鳴くャァつまこいくと三聲鳴く

凡三首

▲嬉しめでたの若殿さまよ、知行ます程なしに

▲逢ひた見たさい飛びたつ如く、籠の鳥かやうらめしや

見たさい―見たさはの誤か

▲籠の鳥ではわしやござらねど、親が出さねば籠の鳥

凡三首

飛驒の國の人の心せばし、他にもるょ氣なき故なり、信濃の國心すこやかなる風なり、此國或寺に猫あり、世にいふねこまたなり、商人來りて所望しかへり、我家に惡鼠ありて猫をくひ殺す事度々の事なり、彼の猫を合せければ、鼠をくらふ、鼠又猫をくらひて二つのけもの死しけるとなり、昔夫子陳蔡の間に苦ませ給ひし時、夜に入

我も
むらで
を
射く
とうて

たて
ちら
羽をも
茶
やし
や

りて身のたけ九尺ばかりの男黑き衣に冠著たるがつつと入り來りて、聲をあぐる事おびたゞし、子貢進みより、こは何者ぞといふ所を、中にひつさけ腰にはさむ、子貢つゞいて大庭に引出して鬪ふに勝たんこと叶ふべからず　夫子さしのぞき見給ふ所に、彼の男がつらがまちの間時々ひらきあふ所ありと見えしかば、そのつらがまちかいさぐり取て引寄せ、とびあがつて上になれと敎へ給ひければ。子路心得てくんでおし伏せ、之を見るに大なる鯰の九尺あまりなるにぞありける、夫子見給ひて物老いぬれば群の精これによる、龜蛇魚鼈草木の類に至るまで、久しきものは神皆よりて妖怪をなす、されば是を五酉といふ（酉といふは老ゆるなり）殺す時はやむと語り給ひけり（搜神記南海傳等に）見ゆるかの魚をしたゞめて人々にすゞめし程に、うゐを救ふ、天より賜ふにやと後世の人はいひけり、凡五行の氣をうけし類、老いては皆怪をなすべきもの也、人の老いたるも怪をなすものにや、大原の王仁祐が祖母二百餘歳ばかりにて、形小くなり三尺に足らず、妖をなしたるの類鬼神論に出たり、鼠老いたるにより猫をはむの妖をなしたるにや

（榎戸―板戸の誤なるべし）

（戀と情―此歌解し難し）

▲わしは此町の軒端の雀、聲で聞きしれ名を呼ぶな

▲殿御忍ぶはしんきでならぬ、くゞり九つ古川七つ十二小口の榎戸をあけて、忍びこんだら夜が明けた

▲戀と情はきりあるものよ、したでおくるはみへのおび

凡三首

上野

▲十七かむろのこぐちにひとり寢て、花がかゞると夢に見た

▲人はともあれかくもあれ、わしはめじかとかたならびよ

▲白鷺や舟のへさきに巢をかけて、波にゆられてしやんと立つ

凡三首

下野

上野の國は物に臆する事なき風也、軒端の雀といひしにより、かくとだにえやは伊吹のさしも草とよみし實方朝臣は行成と同じ時の殿上人にて、口論をし行成の冠を笏にておとされしを、さらぬ體にて冠を著、色をそこなはずして、是はいかなる故に亂冠にあひ候ふやらんと申されければ、實方いへらんかたなくしらけて立たれけり、主上此事をひそかに御覽ぜられて、實方を陸奥の守になして遣され、終に召し還されずして國に卒す、歸洛せん事を願ひて、今一たび臺盤のいひをくはどやと言はれけり、其後實方雀とて、殿上の臺盤のあたりに必ず雀ありけりと言ひ傳へたりと百人首の抄にあり、其後歌の會席にてこけたる殿人ありしを若き人笑ひしに、年老いてこけるを笑ふ人々の命長かれ思ひしらせんと讀みし人もあるに、歌道をたしなみ學問する人のつゝしみ第一なるべし、下野陸奥は詞訛多しといふ、なまるといふ事五音四聲のわかちを知る時はなきはずなるを、四聲の考なくして、妄に詞を使ふ故なり、此國に限らず諸國とも四聲の分ちをいへば、雲はくゞ蜘蛛はくゝも蟋はこゝ鯉

いへちんーいちへんの誤か

くも、こゝ—原本は是等の旁點に各差別をなしたるもさして要なければ略す

ぎんぼしーぎばうしの事（旁註）

くて—食うて

さんしよのせい—はやし詞

はこゝ海人はあま尼はあま此平上去入の事を心得る時は皆分つ事なれば、みづから知るべき事なり、五畿内の人音の事を學ぶにあらず、都に近きゆゑ、よき音を自然と小兒より聞きおぼゆる故なり

陸奥

▲橋のぎんぼしを五兵衛かとおもうて、既に詞をかきようとしたが、さんしよくて見て胡椒くて見れば、いとこどしやら、にてからい、さんしよのせい

▲秋風が吹けばいの、秋風がふけばサ豆の葉もかれるいの、豆の葉もかれるサ枯れたが大事か、なんとしよ、さんしよのせい

▲あのむら千鳥つらにくやサわれをつれてはなぜ行かぬ、つれて行たら殿御にあうてサわしが心の底うちたゝき、見すてられたら島國へ、さんしよのせい

出羽

凡三首

浪曲
ちゞみ
かみ
代
浪花節

白
ひとゝせ
高きを
浪花節

よられ―ゆられる事（旁註）

▲橋のらんかんに腰をかけ　沖をはるかにながむれば、沖の鷗が三つつれて又三つつれてむつまじくよられながらも君戀し　さんしよのせい

▲明くればいでて暮るゝまで、辛苦するのはたがためなるや、末をとけんと思ひつめ、身は粉になるとかまはぬに、つれないことばいかゞせん、さんしよのせい

凡二一首

陸奥出羽の風俗民家に子をぶつかへすというて、三歳の比父母これをくびり殺す、人これを怪まず、夷狄の如くありしに、仁風及び今其事なしといふ、陸奥の國或村に古塚のありしを、其里の者畑地にせんとてあばきしに、大きなる郭を掘り出しあけて見れば、錦の直垂に鎧甲に太刀をはき、そのさま七十歳ばかりなる老人と相見え生けるが如し、所の役所へ訴へ見分をうけ、吟味の處姓名かつてなし、定めて秀衡にてもありなんとて、今その所に社を建て祭りありしとなり、納めやうにより數百年を經ても損ぜざる納めかた有る事は古書にくはし

山家鳥虫歌　巻之下

▲松より巣だつ鶴の子の、千とせは君と親のかげ　若狭

▲はしる舟をも招けば磯へ、よるは心のまことなり

▲よそに思ひし昨日のあやめ、けふは我家のつまとなる

▲むかし竹馬老いては末の杖となりたるおやぢさま

凡四首

▲山かげやいがらし川の流れには、みやまの奥のきよのみづ　越前

▲月の夜にさへおくりをもらうて、見すてられたら闇の夜に

▲思うて来たのに水かけられて、わしが思ひを水にしやろ

見すてられたら　一本に「見すてられたよ」とあるよろし

▲相性みよゝりかひしやう見やれ、小鬢なでうよりひつなでうよ　かひしやう—甲斐性

▲しんき〳〵が三つ四つござる、語るしんきに語らぬしんき、一つ枕に寝ないしんき　ひつ—米櫃の意

凡五首

▲をさまる世のうれしさは、稲穂さかえる秋の水　加賀

▲里のあたゝまりでむしやれてくらしや、われらはみ山の蟬のこゑ　むしやれ—蒸され

▲けふかあすかと朝日を待つに、つひに曇りて日をくらす

▲さまは流れの瓢簞男、ぬらりくらりはようもよも　ようもよも—よくも〳〵

▲みやま六月布子を著るは、金がないから冷ゆるやら

凡五首

▲親子草とは年ごとに古葉ゆづりのわかばかや　能登

▲きぎす野にすむ雲雀は山に、鶉粟穂につまおもひ
▲飲みやれうたやれさきの世は闇よ、今は半の花ざかり

見しよもの―見せようもの
ねばる―油の濃厚なるをいふ
けがふさん―毛がふえんの意か

▲沖の戸中の三本竹は、うまず竹やら子かさかぬ

凡四首　越中

▲よろづ世をへる音なしの、瀧の流れはよもつきじ
▲あゆは瀬につく鳥は本にとまる、人は情のしたにすむ
▲死んで又くる釋迦の身がほしや、見しよものつらあてに
▲買うてくりやれよねばるのを一兩、ごまの油でけがふさん

凡四首　越後

▲老いせぬ千代の松さかや、谷間の岩に龜あそぶ

しんがい―心外にて殘念にもの意
こめいこと―こいといふこと

まなご―まさごの事（旁注）
しんば―新葉
つよばみ―ろばみの事（旁注）

▲わしが思ふとて戸板に豆ぢや、なまじ言はぬがましぢやもの
▲千里はしるやうな虎の子がほしや、やるぞ此文江戸までも
▲いとし殿御のしんがい田がわれた、夕立俄にこめいこと
▲月夜烏は迷うても鳴くが、わしがしんじつ思ふでもなし

凡五首　佐渡

▲佐渡と越後はすぢむかひ、橋をかけたや船橋を
▲さまは釣竿わしや池の鮒、つられながらもおもしろい
▲いとし殿御にあひたいことは、川のまなごで限りない
▲雉のめん鳥奥山さして松のしんばのつよばみに
▲池の子鮒に心をぐれて立ちやかねたる白鷺よ

凡五首

▲稲の葉むすび思ふこと叶ふ、末は鶴亀五葉の松　丹波

▲わしが事かや志賀唐崎の、一つ松とはたよりなや

▲谷の小藪に雀はとまる、とめてとまらぬ色の道

▲雨はふれ〳〵雪ふるな、忍ぶ細道竹たわむ

▲梅やさくらは七重も八重も、なぜに野菊は一重咲

凡五首

▲わしとおまへは小藪の小梅、なるも落つるも人しらぬ　丹後

▲岩のしみづは底から湧くが、さまの心も底からか

▲月は東にすばるは西に、いとし殿御はまんなかに

▲人はけなりや両手に花を、わしも片手に花ほしや

すばる―昴星

▲きのふや今日までみづしの女、今は二ヶ所の倉のぬし

▲丹後田處よい米どころ、娘やりたや聟ほしや

凡六首

▲親は子というて尋ねもするが、親をたづねる子は稀な　但馬

▲ひさごくづやに蚊遣をたきて、綾や錦とゆふすゞみ

▲思案しどころふんべつ處、親の意見もきゝどころ

▲與作丹波の馬追なれど、今はお江戸のかたなさし

▲與作おもへば照る日も曇る、關の小萬がなみだあめか

▲雨はふるとも身はぬりやせまい、さまの情を笠にきて

▲みやこ〳〵とわしつれて來て、こゝが都か山中を

凡七首

ぬりや―ぬれは

おなれと―末詳
なよな―はやし詞

太平顔―おほへいがほ

▲つきせぬしるし岩に花、峯の小松のしげりあふ　因幡

▲あさまよりの小鳥が露にしよぼろぬれたやうな、ゆら〳〵と苗をとる露にぬれたよな

▲けさきたおなれとがかたびらはなよな、裾も縫はずにきるかたびらはなよな

▲ひるま米つくは十二からうすでなよな、嫁も姑も寄つてつきやれよ、十二からうすでなよな

▲お主にやいとま取りあの山こえて、都まさりの親里へ

▲後世と契りて今又あきやる、釘をうちたや後のつま

凡六首

▲心かよはす杓子のさきで、言はず語らず目でしらす　伯耆

▲金の威光の太平顔も、きのふかぎりのさんづ川

打たしやる―原本「うたせろ」とあり一本により改む
ふしるのみ―粥汁の實
そふとめ―早乙女の訛
ふかねど―ひかねどの訛
ひるまもち―末詳
かたぶち―かたびらの訛
千家北島―共に大社に仕ふる名

▲ばくち打たしやる大酒のみやる、わしが布機(ぬのはた)むだにして

▲貴間はでかいたが何のをけのみでなよな、いそばたのわかめよしそれがおしるのみでなよな

▲そふとめのまたぐらを鳩がにらんだとな、にらんだも道理かや、またに豆をはさんだとなよな

凡五首　出雲

▲これの石臼はふかねどもまはる、風の車なら猶よかろ

▲ひるまもちのござるやう、あかいかたぶらで、ぶらりしやらりと、あかいかたぶらで

▲さんまれこれの嫁御さま、どこなそだちのさんまれさまぞ、稲のうらほののぎそだち

▲千家北島にやア燒餅がはやる、なかに味噌入れてポッポほや〳〵と

凡四首

▲京の大佛に帆柱もたせ、鯨つりたい五島浦で　石見

▲關の地藏に振袖きせて、奈良の大佛聟にとろ

▲これの親方御繁昌をなさる、奥は琴の音中の間鼓（つゞみ）、かどはものもが絶えませぬ　隱岐

凡三首

▲背（せな）をたゝかれしんこ程はれた、これも情氣のかたまりか

▲いなしよ〳〵と思うたうちに、太郎が生れていなされぬ

▲われは奥山のさゝ小笹、藤にまかれてねとござる　播磨

凡三首

▲池田伊丹の上諸白も、錢がなければ見てとほる

ものも―物申、案内

しんこ―新粉餅

欠

糸竹初心集　上巻

先一節切尺八は、其濫觴まち〳〵にて、さだかならず、そのかみ異人有て、宗佐老人に傳へたるよし、代々いひ傳へたり、然しより宗佐は高瀬備前守につたへ、備前守は三井寺の日光院に傳へ、日光院は安田城長に傳へ、城長は大森宗君に傳へてより、世にひろまり、文祿慶長の比尤盛也、此宗君は、昔は豫州の大森彦七が末孫、勇士武略の後胤也、織田信長公に仕へて、人に名をしらる、信長公逝去し給ひしより、ひたすら隱遁の身となり、霞をあはれみ露をかなしむ觀念々ことゝし、尺八の妙音味へ、此道中興の開山となれり、流のすゑをくむ我等まで、遺風をしたふといへども、夢にだにもみず、わづかに其かた計りうつして、今書にしるし宗君門弟の外、餘力有て、音をしらべんとおもふ人の、一筋となさむとおもふのみ也

欠

はろぼろ―暮露の字をあつ、この修行者の事つれ〴〵草に見ゆ

一虚無僧尺八といふは、長さ一尺八寸に切るゆゑ、尺八といふとぞ、濫觴はたしかに不知、そのかみ由良の法燈此道の祖たるよしといへども、了簡せず、昔よりほろぼろの家に用る物と聞えたり、梵士漢士色おししら梵士などいひしもの、此尺八の執行者と聞えたり、近き比不人といふこむ僧有て、ごろといふ事を吹出し、その外れんぼながし、京れんぼ、さむ也井川、よし田などいふさまざまの手有之、いづれも律呂の調子にあはせたる物とは聞えず、されども我道にあらざれば、其深き事をしらず

一一節切の尺八切りやうの事、節を一つこめ長さ一尺八分に切る故、此名を付くといふ、節より下は七寸、上は三寸八分に切る也、但竹のふとほそによりて、調子違物なれば、極めて寸は定らず、筒音を黄鐘の調子にあはせたる物也、音色は笙のごとく、ゆびづかひは篳篥に似たり、歌口のしめ様は、笛同前也、ゆび遣ひ卅二あり、笛は惣の穴七にしてゆびのあげさげ百廿八あり、調子は十二より外にあらず、壬乙あるによりて、しらざる人は調子多様に聞ゆる也、筒音は盤渉也、ひちりきは穴の数九つ、ゆびのあげさげ五百十二あり、これも調子は十二調子より外に非ず、五調子を專らとす、筒音は平調也、簫は　竹数十七本あり、一つに一調子づつ切たるもの也、但十二調子より外に非ず、のこりは同音也、竹十七は五行十二支を合せたるもの也、吹きやうの息づかひ内外あり

一一節切吹様之事、まづ左の手をうへになし右の手を下になすべし、左の大ゆびにてうらの穴をふさぎ、べにさし指にて二の穴をふさぎ、右の人さしゆびにては、三の穴をふさぎ、べにさしゆびにては、四の穴をふさぐ、一の穴と云ふはおもてのふしのそばなるを云ふ、次を二、次は三、下を四といふ、まへにあけたるをうらといふ、第一おほえずして叶はざる事は、指づかひの名也

一節切惣の穴の音知る事

ふゝハ　惣の穴をふさぎてふくを云ふ

いゝハ　惣の穴をあけてふくを云ふ

やゝハ　一二三四をあけうらばかりふさぎたるを云ふ

ちトハ 一をあけ二三四とうらをふさぎたるを云ふ
ほトハ 四をあけ一二三とうらをふさぎたるを云ふ
うトハ 三四をあけ一二とうらをふさぎたるを云ふ
ゑトハ 二三四をあけ一とうらをふさぎたるを云ふ
りトハ 二三四とうらをあけ一ばかりふさぎたるを云ふ
ひトハ 一とうらをあけ二三四ふさぎたるを云ふ
しやうトハ 三四とうらをあけ一二ふさぎたるを云ふ
神トハ 四とうらをあけ一二三ふさぎたるを云ふ
たトハ 一二四をあけ三とうらをふさぎたるを云ふ
るトハ 二四をあけ一三うらをふさぎたるを云ふ

以上十三字也

フホウエヤリヒ

上神イタルチ　以上十三

これをよくそらにておぼえざれば吹き習ふ事成りがたし　但此内ヤタルこれ三つは二やうに有り

一㋮ 一三四明うらと二ふさぎたるをやと云ふ
一㋯ 一と三ふさぎ二と四とうらあけたるをもたと云ふ
一㋰ 一二四裏をふさぎ三ばかり明けたるをもると云ふ

これは双調の調子、盤渉の調子に、このゆびを用る也、黄鐘平調一越には右のヤタルを吹くべし、よく〳〵心をとめゆびづかひちがへず、空にておぼゆべし、惣じて尺八は、五調子用ひ候へども、まづ歌は一越の調子を専とする也

一一節切證歌

▲やまとをどりのうたふきやう

よしのゝをやまをゝ、ゆきかと見いれば、ゆきではあらでんゝ、やこれの、はなあの

○吉野の山を雪かと見れば雪で

はあちでやこれの花の吹雪よのやこれの

ふぶきよのんよ、やあこれの

▲いせをどりのうた

あのきみさまあはあ、いせのはまあそだあち、めもとにしほがやれ、こほれかゝる

▲あふみをどりのうた

ふうらいふらい、ふるつまいとしなわれふるつまはなをゝいとしやれ、なをいとをしい

▲すげ笠ぶし

○あの君さまは伊勢の濱育ち目元に鹽がやれこぼれかゝる

○ふうらいふうらい古妻いとしなわれ古妻は猶いとしやれ猶いとし

やぶれすげかさややんやあ、しめをがきいれていのをゝ忘い、さらにきもせず忘いいさんよ、さあややあさんよさ、すてもをせず

○破れ菅笠メ緒が切れて更に著もせず棄てもせず

▲海道くだり

おもおしいいろの、かいどくたりやああ、なにとかたあるとつうきいせじ、かもがあはあしらかは、うゝちわあたり、いゝ、おもふひとにはあゝあはたぐちとよをゝ、しのみやあがはあらやあ、じうぜゑんじせきやあまあさんりを、うゝちすうぎて忘ゝ、ひとまづうもををとにい、つうくうとの

○面白の海道下りや何と語るとつきせし鴨川白河打渡り思ふ人には粟田口とよ四宮河原や十禪寺人松本につくとの、此唄閑吟集にあり

これより末尺八吹きやう同前也

▲平調の調子よしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではあああらでんよ、やこれのはあなのふどきよのんよ、やあこれの

▲平調伊勢をどり

あのきみさまあはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれ、こほれかゝる忘

此外近江をどり、すげかさ、海道くだり、いづれのうたにても、右之格を以て吹きやうもふべし

▲双調のよしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではあああらでんよ、やこれのはなあのふどきよのんよ、やあこれの

右にしるすごとく双調と盤渉とには後のやたるを吹くべし

▲双調いせをどり

あのきみさまあはあ、いせのはまあそだち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

▲黄鐘よしのゝ山

よしのゝをやまをゝ、ゆきかとみいれば、ゆきではあああらでんゝ、やこれの、はなあのふどきよのんゝ、やあこれの

▲盤渉よしのゝ山

よしのゝをやまをを、ゆきかとみいれば、ゆきにはあああらでんゝ、やこれの、はなあのふどきよのんゝ、やあこれの

▲黄鐘いせをどり

あのきみさまはあ、いせのはまそだあち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

▲盤渉いせをどり

あのきみさまはあ、いせのはまそだち、めもとにしほがやれこほれかよるゑ

此外五調子の手どもあまた候へども、數おほくこまかなる事に候へば、のせがたし、但黄鐘のうち、世間によく吹き覺えたる手、少ししるすものなり

▲初手

ウエフエタエフエ、ヽヽヽヽフエウエ、ヒエフエウエホウルホ

▲返シ

ウヽタエフエ、タウルホ

此手黄鐘卷頭の手なるによりて初手といふ呂也、やはらかにかろく吹くべし

▲安田

タチタチヽ、ウチタエフエ、ヽヽヽヽフエタウタエ、チタチヽ、イエウエ、ホウルホ

これより末初手の返しを吹く、此手江州の住　安田と云ふ仁、吹出す手也

▲手巾

ウエフエタエフエ、ヽヽヽヽフエウエ、チタエフエヽフウルホ

▲返初手におなじ

此手江州大津の住、とぎやの佐右衛門二郎吹出す也、刀をとぎける時、此手をおもひ出し、手を拭はで、吹てみるに吹きけるうちに手かわきたり、さるによりて手巾といふ、此手の中にチタエフエヽフウルホと吹くところあり、吹きやうおほし、チタエイヽフウルホとも吹く也、これをぬき手巾と云、日光院吹出さるゝ也、又チタエフエウエホウルホ

▲返

ウヽフエフエタウルホと吹く也、これは筒手巾と云ふ、宗佐老人の手也

▲后手

ウエフエタエフエ、ヽヽヽヽフエタイタチタエフエ、チタチヽタエフエ、ヽヽヽヽフエウエ、ヒエフエウエ、ホウルホ

▲返シ初手におなじ

此手は文祿の比、後陽成院の皇后に、糸竹の音に長じ給へるあり、此手を吹きいださせ給ふ、さるによりて后手といふ也

▲ころび

イエフエタチタエフエウタエフエ、ヽヽヽヽヽフエヽウ、タエイエヽ、フウルホ

▲返シ

ウヽエルタエフエ、タウルホ

此手頓阿彌吹出す、返しの一の息にころぶゆび有り、他流には頓ころびとも云ふ也

▲小兒

イエイフエヽタイ、エウエルホ、フエヽヽヽヽフエタウタエ、チタチヽエフエウタチ・イエウエ、ホウルホ

▲返初手におなじ

此手は門阿彌吹出す也、ある山寺の小兒に戀慕して吹きし手也、さらば明日まゐらんと

云ふ事あり、黄鐘の大事これなり、此外黄鐘の手ども、いくつも有之候へ共、しるすに及ばず、但ほど拍子タエフェはひろふ、ウトチトはのぶる也

▲盤渉の調子つしま

フヽホヽホヽフホヽ、ホウヽホエウヽヽホ、ホエエウヽホ、ホエウヽホ、　高音リヽヒヽ。
ヒヽリヤヤ、ヒリヽヤヤヽ、ヤヽタヤタエヽ、ヤタヤタエウ、エヤエウホ　おろしホウ
ウホエウヽホ、ホエヽウヽホ、エウヽエヤエ、ヤタヤタエウエ、タエウホ

▲二段の序

タヽタヽ、ヽヽタヒヽ、ヒ神ヽヒ、上神ヽヒ、ヒ上上神ヽヒ、上神ヽヒ

高ねおろしは、初段同前、三段めは二段めのごとくに吹て、まを同じ如くにして、手を吹入れたるもの也、其手定らず

▲さがりは

ヒイヽヽヽヒイヽ、ヽヽヽヒヽ、ヒイヒイ、ヒヽイヤエ、ヽヽウエヽ、エエヤタヽ、ヒ

イイホ

是を何べんも吹く也、則ほど拍子は笛の如く也、此内おなじ字の重りたる所の吹きやう、何にてもふさぎたるゆびを、少しうごかしたる物也、たとへばフの字の重りたる時は、四のゆびを動すべし、ホのゆびの重る時は三のゆびを動すべし、ウのゆび重る時は二のゆびを動すべし、エの重る時は一のゆびを動すべし、やの重る時は、うらのゆびを動すべし、リの重る時は、一のゆびを動すべし、ヒの重る時は、三のゆびを動すべし、神の字の重る時は、二のゆびを動すべし、いの字の重る時は、三のゆびにて打つべし、上の重りたる時は、二のゆびを動すべし、たの重る時は、三のゆびを動すべし、ちの字の重る時は、二のゆびを動すべし、又音取はたとへば一越(いちこつ)の調子を吹かんとおもへば

ウフフホフヽウ、リウリウフウ

これを呂の音取と云ふ、同律の音取

ウリヤリヤエ、ウリウリウフウ

如此に吹て其後、一越の手にても又歌にても吹くべし、何も如此に音取ある也

▲平調呂の音取

エホホウホホ、エイエイエホエ

▲同律の音取

イエフエエウ、タイタエフエ

▲双調呂の音取

ヤウホウルフ、フウホフヤ

▲同律の音取

イヤフヤヤ、タヒタヤフヤ

▲黄鐘呂の音取

ウエウ、チタウルホ

▲同律音取

ヤヤチリヤエエ、ヤエルホ、フエチリチ

▲盤渉呂の音取

エヤエ、ヒタエヤウ、ホフエウホヽ

▲同律音取

リリヒイリヤヤ、リヤエウ、ホフエウホ

右いづれも、調子吹く時、まづ此音取吹かざれば、調子かはりてうつらぬ物也、此外音取あまた候へども、數さだまらず

宗君流の書物に傳る手の數は

黄鐘廿三　盤渉十六　一越十五　平調十三　双調十一

此外さらばの音取、またゝきかへしみだれ、戀の音取かんのゆりなどは、宗君一子相傳の所なり

糸竹初心集　中卷

琴の次第の事

抑日本に下々まで、琴をもてあそぶ事は、中比九州に玄淨法水とて、二人の僧あり、或時長崎に至て、琴の引きやうを唐人より傳はり、其後都へのぼり、公家殿上の交りをなし、寛永二年の比、琴の御ゆるしを下し給りて、法水は關東にくだり、琴をひろむる、玄淨は筑紫にかへりて、これも琴を專らに執行す、さるによりて、今在家にひける樂を、つくし樂といふ也、かゝりとていやしき賤のわらや、不淨なる工商下人の家などにて、しらぶべき事にあらず、神をすゞしめ菩薩の現じ給ふ妙音なれば、四町のうちを初め奉り、月卿雲客やんごとなき人のもてあそび給ふ物なれば、そのおそれ有るべき事也、凡糸の調べやうは、まづ一越に調べんと思ふ時は、一は一越、二は下無、三は黄鐘、四は盤渉、五は一越、六平調、七は二のうは調子、八は三のうは調子、九は四の上調子、十は五のうは調子、とは六のうは調子、いは七のうは調子、きんは八のうは調子也、残る調子もこれに准ぜよ、又雲井の調べといふ事を此比八橋檢校ひき出したり、此八橋もと三味線の上手なりしが、中年より琴を學び、不思議に、琴の妙をえて、今日本の名人となる、音聲色ざしほど拍子、中々心におよびがたき上手なり

執行―修行に同じ

一琴を引きならひやう、曾て知らざる人は、爪のさしやう、糸のおさへやうを見習ふべし、まづ大指にさしたる爪は前爪と云ふ、中指にさしたる爪を、向爪と云ふ、人さし指にさしたるを、脇爪といふ、糸の名は手前なるをきんといふ、次はいといふ、又次はと云ふ、それより次第々々に、十九八七六五四三二一也、此中におさゆる糸は、四七九八也、但引きならひにはおさへずしても苦しからず、爪かず計りよく覺えたるよし、初めには糸あはせがたきもの也、糸あはざれば何事引きてもうつらぬものなり、されば糸をよくあはすべし、但右にしるす糸のあはせやうは、調子を聞かずしてはあはせがたし、初心なる人のあはせ習ふは、初め一二度は心得たる人にあはさせて、調子よく合ひたる

時、糸十三ながらいづれもぢのきはに墨を付けおくべし、糸しめゆるめにて、調子あはするにあらず、ぢの立てどころにて、合せたるものなれば、ぢをはづしたりとも墨をしるしにて、本の所にぢを立つるやうにすべし、大かたはあふもの也、又ぢを立てづめにしておけば、糸たび〳〵きれてあしゝ、其上糸のびるもの也、墨を證據にして、糸をよく調べ習ふべき事肝要なり

▲すががき引きやうの事

三テン四テン六テン五〇三テン四テン五テン六テン七テン八テン九テン十〇八テン九テントテン十〇八テン九テントテン十テントテンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンテンイテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テン九テン八テン七テン六テン五

此うちてんと有るは、いづれもみな打爪也、其外はみな前爪にて引くべし、打爪といふは向爪脇爪ふたつの爪にて、三筋ばかりを、てんとうちかきたる物也、うち所はたとへ

ば

三を引ての跡のうち爪は、一二をうつべし

四を引てのあとのうち爪には、一二をうつべし

六を引ての跡のうち爪には、二三四のあたりをうつべし

七を引ての跡のうち爪には、三四五のあたりをうつべし

八を引ての跡のうち爪には、四五六のあたりをうつべし

右いづれも、次第々々におなじ心なるべし、但糸三筋うつにはさだまらず、前爪より二筋ほど先をあたるに任せうちたるもの也

▲りんぜつ引きやうの事

テン五五テン五〇三テン四テン五〇三テン四テン五テン六テン七〇テン八八テン八〇六テン七テン八〇六テン七テン八〇テン十十九八テン七テン六テン五〇三テン四テン六テン七〇テン八九〇テン十十テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十〇八テン九テン十〇八テンイ〇テンキンテンキン〇トテンイテンキン〇トテンイテンキンキンテン、イテントテン十〇八テン九テン十テントテンイテントテン十〇八テンイテントテン十〇八テン九テン十〇八テント十〇八テン九テント十〇八テン九テン八テン七テン六テン五

右すがかきの如くてんといふは、みな打爪也、その外は、いづれも前爪にて引くべし、

又むかふ爪といふ引きやう有りまづ

一五と引く時は一は向爪、五は前爪にて引くべし

二七と引く時は、二はむかふ爪、七は前爪にて引くべし

三八と引く時には、三はむかふ爪、八は前爪にて引くべし

四五と引く時は四はむかふ爪、九は前爪にて引くべし

いづれも糸四つはざみ也、歌のうちには幾所も有るべし、よく〳〵心を付けておほゆべき也

▲あふみをどりのうた琴引きやう

○これかち見れば近江が見ゆる笠買てたもれ近江笠やれ近江笠

七三八七六六七八九十八　七三八七六六七八八七六五五
これゑゑからあみれゑば、　あふあふみがあみゆうるな、
八八九十十　十と十五十九八九十と十
かさあこて、　たもをれ　あ　ふ　みがさやれ　あ　ふみがあさあ

○小倉の野邊の一本薄いつかさて穂に出て亂れ合のゐたまこがれて秋こがれつちんや

此うちむかふ爪にて引く事有るべし、よく〳〵心をとむべし

▲小倉をどりの引きやう

九十九十といきんいと　十十九十九十と十九八
をぐうよらあのをよ、　のおんのおんのへゑの、
十九十といきんいと　十十九十九十と十九八
つうよさあてゑよ、　ほをんほほんほにでて、
九十と十九十　八九十と十九八
こかれゑんて、　秋こがれつらんや

▲あひの手

「八「きん「いといいきんきんいきん「とよ五十九八

▲伊勢をどり引きやう

七八八九十八八七八七六　五九八七八七六五一五四三
あのきいみさまあはあよ、　いせのはまあよそだあち、
八七六六五七八　九十と十五十九十九八
れゑかかるぞへ　めゑもとにいしほがやれ、

○あの君樣は伊勢の濱育ち目元に鹽がこぼれかかるぞへ

七三
こほ

○芳野の山を雪かと見れば雪ではあちでやこれの花の吹雪よのやこれの

九十八九八九十十　九十と十八九十
よしのよをやまを、　ゆきかとみいれば
十と十九八　九十と十九八
ふどきいよのむよ、　やあこれの

▲芳野の山

▲すげ笠ぶし

七八八九十十九十八九五十九八七　九九八七六七八七六五五五三
やぶれすげがさあやあんむやあ、　しめをがきいれていのをゑい、
九十十いといんいきん
さらばきもせずゑ

○破れ菅笠メ藉が切れてさちば著もせずさんさ捨てもせず

九十十いきんいと十十　九十と十九八七八九十
いきんさあ、　あよ　や　あよさむよさすてゑもをせず

▲ころくぶし

七八八九十十九十八九七八七七八　七八八九十十九十八九七八七七八
ころくついたるたけのおをつゑころく、　もとはしやくはちなかはあよふえころく、
八九　十九八七七八　八九十八九十　十十八九十九八七八七七八
すうゑよはほよほんほよほんほほんほ、　のんよをよしよんしよ、
八九十九八九　八九十八九十　十十八九十九八七八七七八
しよんしよんしよんしよろしゆ

○小六ついたる竹の杖本は尺八中は笛末は女郎衆のそれ誠に筆の軸竹

五九九九九八七六六　七八七六六
ののんかよいやかか　かよんかか
九十八七六七八　七六六五
そんそれまことに、　のほんほほをさあて、
七八七六六　七六七八
ふでのぢくうたあよあけ　ゑころく

▲しばがきぶし

○柴垣越してな雪の振袖ちらと見たとな振袖雪の雪の振袖ちらと見た

しばあがあき、しばあがあきしばがきこをしいてなああょああんゆきいのむなふりそを
でゑょちらと見いたあとなああょあんふりいそをでゑゑゆうきのなんなんさあんほさい
よゆきのいのむななょふりいそでゑちらと見いたあとなああょん

○裏のせきの清水は夜毎に落つれど名も立たぬゑいそれ夜毎に落つれど名も立たぬ

▲鹿をどりのうた

うらうょょらの、せきのをょしみいづはあょ、よごとをにおつれゑど、なもをたょあぬ
うょゑいそれよごとをに、おつれゑどなもをたょあねうょ

○あ町でのやき手は誰々ぞそりや中に明月伊勢定家そりや尾上野風にかしのいに花垣鼠寺吉川よそりやよ太郎よ、〳〵とよひやいたしてまふきせた

▲あひの手

おちよでのやきてはたれ〳〵ぞ、そりやなあかにめいげついせていかそりやをのへの
かぜにかあしのいいにはなかきせきでらよしかはよそりやよ太郎よよ太郎よよ太郎よとよひやいたしてまふきせた

○岡崎女郎衆はえい女郎衆〳〵

▲をか崎

をかざきじよろしゆをかざきじよろしゆをかざきじよろしゆをかざきじよろうしゆはゑい上らうしゆうを
かざき上らうしゆはゑい上らうしゆ

○一つとや人もえ知ちぬ恋をして涙は秋に絶えやらぬ

▲かぞへうた

ひとつとやあひいとをもゑしらあぬこひをしいてなみだはたもとをにたえやあらぬ

○面白の海道下りや何と語るとつきせじ鳴川白河打渡り思ふ人には粟田口とよ四宮河原や十禅寺

▲かいだうくだり

おもをしいろをのかいどくだありやあょなにとをかたあるうとつうきいせじかも川
しら川うょちわあたりいょおもふひとにはあょあはたぐちとよをょしのみやあがはあ
らやじうぜゑんじ

これより末もかくのごとくくり返して引くなり

此外はやりうたどもあまた候へども、ふしさだまらざるはしるしがたし

八橋流（やつはしりう）くみの名

ゑてんらく　これは古樂の名　天下泰平

梅がえ　宮古鳥（みやこどり）

桐壺　すま
雲のうへ　うす衣
うす雪　からかみ
雪のあした　新曲

此分いづれも、一くみにうたのしやうが六づつ有り、たゞしゑてんらくは七つ有り、其外の大事のくみどもおほく有る也、中に雲井のしらべと申すは、大きにひじする事也

ひじ―秘事

糸竹初心集　下巻

三味線の次第の事

三味線の次第の事―一本には此見出の代に「三味線糸竹、物川ひでんのひきやう」とあり

抑日本に三味線をひき初めし事は、文祿のころほひ、石村檢校と云ふ琵琶法師あり、心たくみにして器用無雙の者なり、あるとき琉球の島にわたりけるに、かの島に小弓（こゆみ）といひて、糸を三筋にてならす物あり、小き弓に馬の尾を絃にかけて引くなれば、小弓とは云ふとぞ、石村これを探りみるに、琵琶をやつしたる物也、いとのしらべやうも、一二はびはのごとく、三の糸はびはの三よりも二調子ほど高くあはせたるもの也と思へり、所のものいひけるは、此島には眞蛇（まだ）の多き所なるが、らへいかといふものありて此まむしを食物とする、さればらへいかのなく聲、小弓の音（ね）に少しもちがはざる故、眞蛇を退けんが爲に專ら引く也、琵琶法師も、爰に逗留の間は、引き給へといふ、其後石村京都にかへりて、おなじく琵琶此をやつし、三味線をつくり出せり、琉球の島よりえて來ると

いふ心にて、りうきうぐみといふ事を作りおけり、弟子虎澤検校に殘さず傳へしかば、虎澤またぐみはてと云ふ事を作り出す、虎澤より山野井検校傳受して、世にひろまる

糸のあはせやうはこれも一二は琵琶のごとく、三の糸は琵琶の四の糸調子也、たやすきものに似て、はなはだ引きえがたきもの也

一琵琶の調子まづ黄鐘の調子に合せんとおもふ時は、一は黄鐘に合せ、二は一越三は平調、四は一のうは調子也、又盤渉に合せんとおもふ時は、一は盤渉二は平調、三は双調四は一のうは調子也、のこる調子も准之、琵琶の樂にあまた有りといへども、大唐より傳へ來るは

一上原石上
一流泉啄木
一玉樹三女

此玉樹といふ曲は、不吉の曲といひ傳へたり、然るを或人うつりをかんがへ、此中一手引きかへたる所あり、されども此曲猶よきにしもあらず、其後もたびたび不吉のためしありける也、又七つばかりかきくだし、三のたゝき、篠むすびなどいふ調の曲の名也、いづれもたやすくは引きえがたき事なり

三味線ならひやうの事

人の引くに心を付けばちの持ちやう、糸のおさへやうを見るべし、或は歌をひかば、まづ其歌のふしはかせよく覺ゆるが肝要也、たとへば忍をかゝんと思ふに、たびたみたる物を書くはにせてかゝるべし、終に見ざるものを何としてか書き出すべきや、三味線もこれにひとしく、我さへ歌を覺えずして、三味線にうたはする事、なかなか成りがたき事也、先づはじめには糸をあはせ習ふが專要

糸をあはせ習ふやうの事

髮筋ほどあがりさがり有ても一調子ちがふもの也―此一句再版本になし

初めはよく引く人にあはせてもらふべし、但調子高きは糸たび〳〵切れてわろし、少しひくめにしらべさせて、糸のよくあひたる時、上ごまより一寸ほど下に、糸三すぢながらに墨を付けおくべし、あがりさがりのなきやうに同じ處に付けおきてあはせ習ふべし、糸ゆるまれば墨下り、しまり過ぐればあがるものなり、髮筋ほどあがりさがり有ても、一調子ちがふもの也、これを證據にして糸をあはせ習ふべし、又こまのたて所かはりても、調子ちがふものなれば、こまのきはに皮になりとも糸になりとも、墨にてしるしを付け、同じ所にこま立つるやうにすべし、或人のいはく

引き習ひ糸をあはせんとおもふなよ
すみだにあへばいとはあふなり

さみせんしやうがの事

▲一の糸のしやうが
- しトハ　ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ
- きトハ　すくふを云ふ
- かトハ　はなして上より引くを云ふ
- さトハ　すくふを云ふ

▲二の糸のしやうが
- つトハ　ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ
- るトハ　すくふを云ふ
- とトハ　はなして上より引くを云ふ
- ろトハ　すくふを云ふ
- すトハ　五すほど下にておさへ上より引くを云ふ
- てトハ　すくふを云ふ
- ちトハ　ちふくらのきはにておさへ上より引くを云ふ

▲三の糸のしやうが

- り（トハ）すくふを云ふ
- て（トハ）はなして上より引くを云ふ
- れ（トハ）すくふを云ふ
- た（トハ）五寸ほど下にておさへ上より引くを云ふ
- ら（トハ）すくふを云ふ

右あはせてしやうがの数十六字あり、これをよくそらにて覚ゆるほど何事にてもはやく引きならふ也

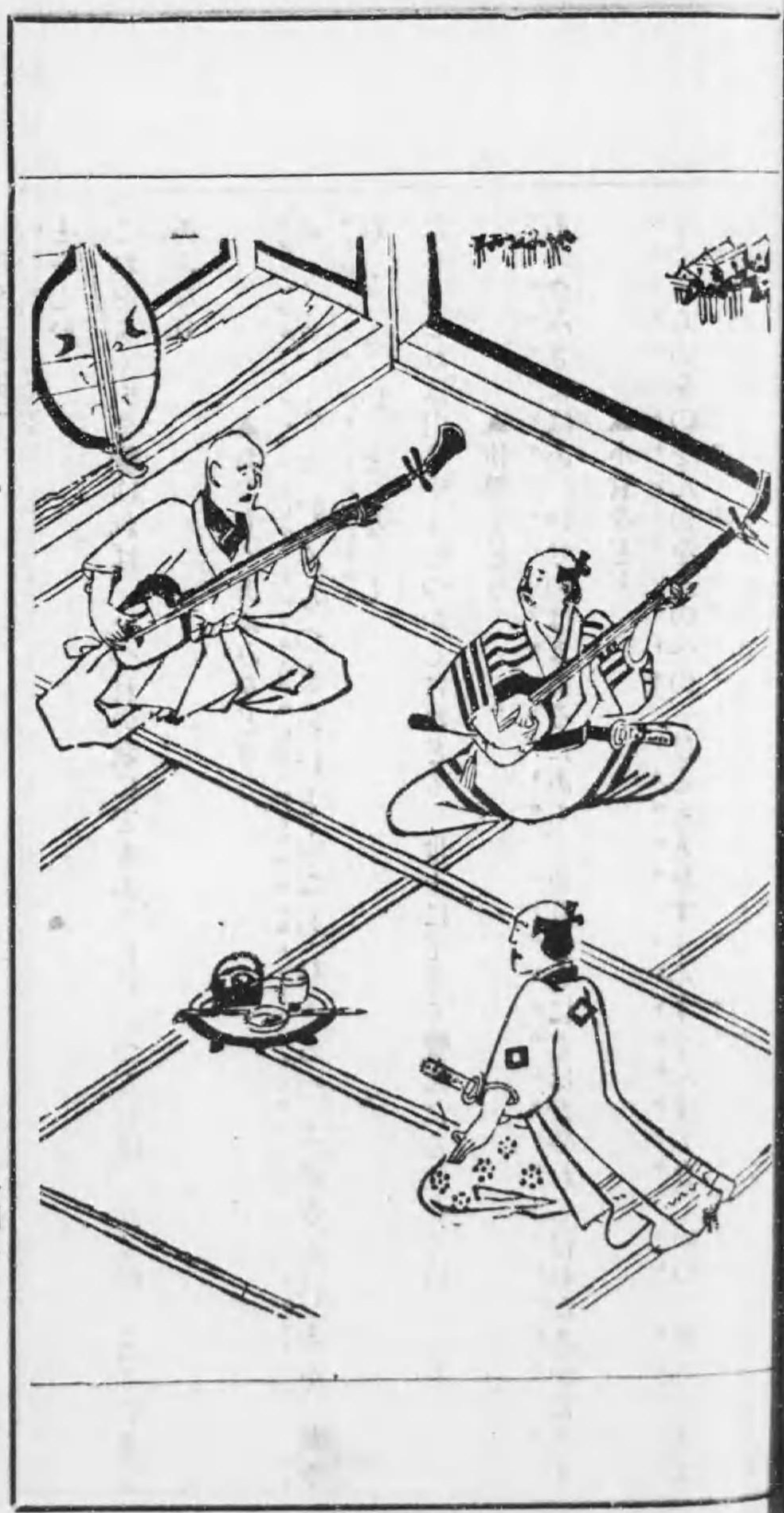
十六字とはしきさかつるとろ（シキサカツルトロ）すてちりてれたら（ステチリテレタラ）

糸をおさゆるゆびは、人さしゆびなり、べにさし中ゆびにてもおさゆる事あれども、それは功者に成りての事也、はじめは人さし指ばかりにても苦しからず

▲あふみをどりのうた三味線引きやう

ふうらいふらい（ステツステチテ）、ふるつまいとしな（ステツステテツト）、われふるつまは（サレトヽツステ）、なをいとをしい（テツトロツヽ）、やれなをよい（テツトツトサ）

○ふうちいふちい古妻いとしなわれ古妻は猶いとしやれ猶いとし



とをしい

これをよく引き覺ゆれば、いづれの歌にてもふしだに一つなれば、かくのごとく引きてあふなり

▲おなじくあふみをどり

ふうらい ふらい ふるつまい いとしなわれふるつまはなをいとをしやれなをいとをし

たゞしこれは引きやうむつかしけれども、世上にてよく覺えたるはかくのごとし

▲伊勢をどり

あのきみさまはあ、いせのはまあそだあち、めゑもとにしほがやれこほれかあかるゑゝ

▲小倉をどり

をぐうらのをのをんのへの、ひともとをすうんすうんすゝき、いつうさてゑほほんほゝんほにでて、みだれやあんやあんあをいのおたまこかれゑんてなきこかれ

つらんや

▲あひの手

テステスツ▲ステレステ▲ツルトシサ▲

▲すゞ笠ぶし

やぶれすゞがさあやあ、あんやあゝしめをがきいれていのををゑい、さらにいきもせず、ゑゝいさあんゝさあああゝやあさんゝさ、すうてゑもせゑずう

▲よし野の山

よしのゝをやまを、ゆきかとみいればゆきてはあゝ、あらでんゝやあこれのを、はなあのふゞきよのんゝやあこれの

▲海道くだり

おもしいるのかいどくだりやあ、なにとかたあるとつうきいせじかもがはしらかはうゝちわあたりいおもふひとにはああわたぐちとよを、しのをみやあがはあらあやあ、じう

ぜゑんじせきやまさんりをうゝちわあたりい、ひとをまあつうもをゝとをにいつうくうとの

これよりさきは三味線おなじごとくに引く也

見わたせばせたの唐橋、のぢしの原やかすむらん、雨はふらねどもり山をうちすぎて、をののしゆくとよ、すりはりとうげのほそみち、こよひはこゝに草まくら、かりねの夢は、やがてさめが井、ばんばとふけば袖さむき、いぶきおろしに不破のせきもり、とざさぬ御代ぞめでたき

▲小六ぶし

ころく、むまれはにしのをくにころく、そをだちやほゝほんほゝほん、ほゝほゝほん、のをよををくはん、んとののんかゝいやかゝかゝんかゝ、そんそれまことにのほんほゝをさあて、むさあしのにすうむなころく

▲柴がき

しばあがあき、しばあがあき、しばがきこをしいてなああゝん、ゆきいのおなふりいそをでゑ、ちらとみいたとなああゝんふりいそをでゑゝゆうゝさいのをなんなもさあんよさいよゆきのななゝふりいそをでゑ、ちらとみいたとなああんあ

▲鹿をどりのうた

うらゝゝゝらのせきのををしみいづうはあゝ、よごとをにおつれゑどをなもをたあたあぬうゝゑいそりや

返しおなじ事也

▲をかざき

をかざきじよろしゆをかざきじよろしゆをかざきじよろしゆはゑいじよろしゆうをかざきじよろしゆはゑいじよろしゆう

近代山井の弟子柳川検校、此道に心をよせ、寤寐にわすれず、天性その骨をえて當代の名人也、色あひばちのしなやかなる事、中々凡人のわざとはおぼえず、さるに依つて、

世に柳川流といふ、くみのかずは、おもて七、うら七と、その外大事ども多き中に、さかい與中島與といふは、大なる祕事とす、はてのかず、三十餘あり、中にもらんこやといふ事は、引きえがたき事也、學ばんとおもふ人はよく〳〵習ひうくべし

一調子を聞き習ふ事、初めは圖竹一竹にて聞くべし、功者に成ては、四穴十二律にて聞くべし、十二律は昔黃帝の臣下、伶倫と云ひし人嶰谷と云ふ所の竹を切て、作り出すと也、去に依て調子を業とする人を伶人と也、此調子と云ふ事は、人間のなすにあらず、天地の間に陰陽造化の氣みち〳〵て、自然の聲音物をかつて、顯るゝ道理也、これ天地の妙一氣の流行不息の印也

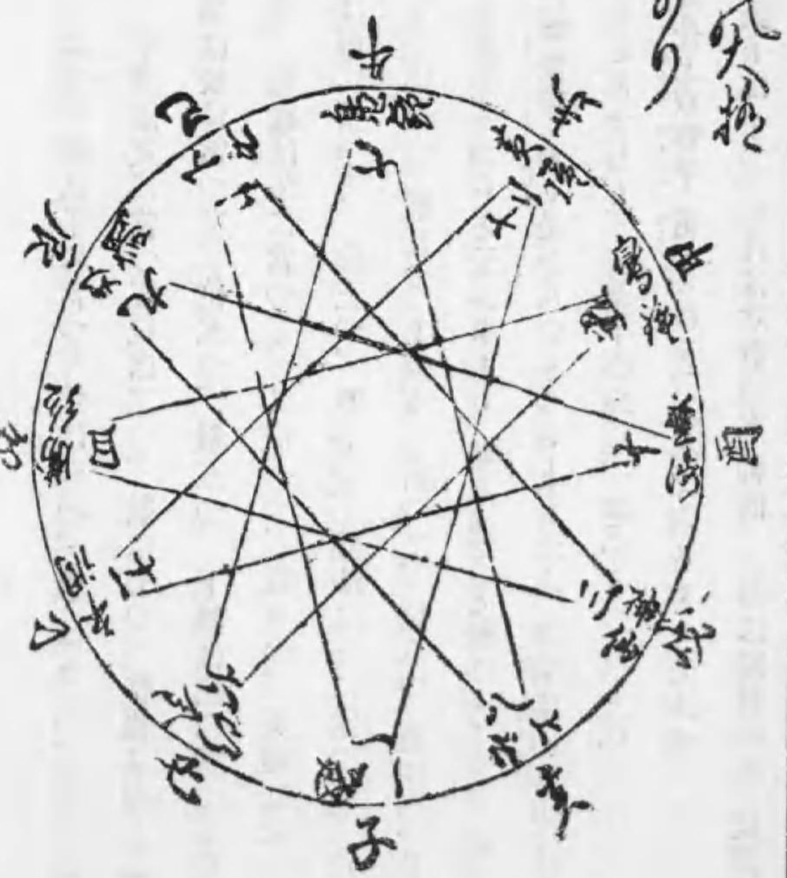
一十干の調子と云ふは、天一の水より生ずるを、盤涉と云ふ、地二の火より生るを斷金と云ふ、天三の木より生ずるを神仙と云ふ、地四の金より生ずるを平調と云ふ、天五の土より生ずるを鳧鐘と云ふ、地六の水となるを勝絕と云ふ、天七火と成るを、黃鐘と云ふ、地八の木と成るを双調と云ふ、天九の金と成るを鸞鏡と云ふ、地十の土と成るを越と云ふ、これ十干の調子也、日月の調子として土無下無をくはへて十二調子也、此十二調子の次第は、まづ一越は子に當つて位は一つ、數は九つ、斷金は丑に當つて位は二つ、數は八つ、平調は寅に當つて位は三つ、數は七つ、勝絕は卯に當つて、位は四つ、數は六つ、双調は辰に當つて、位五つ、數五つ、下無は巳に當つて位は六つ、數は四つ、月の調子是なり、鳧鐘は午に當つて、又位一つ、數九つ、黃鐘は未に當つて、位二つ、數八つ、鸞鏡は申に當つて　位三つ、數七つ、盤涉は酉に當つて、位四つ、數六つ、神仙は戌に當つて、位五つ、數五つ、上無亥に當つて、位六つ、數四つ、日の調子これなり

一又順のうつり逆のうつりと云ふ事あり、順八逆六と覺ゆるなり、順のうつりとは、一黃平　盤双上鳧斷鸞勝　神下是を八のうつりとも云ふ、運氣論納音の五行に、八つをへだてて、子を生ずると書きしも、此調子の理也、逆のうつりとは、

一下神勝　鸞斷鳧上双盤平　黃、これを六つのうつりとも云ふ也

一又十二月の調子は、まづ正月は陰數の木、神仙、二月は陽數の木、双調、三月は陰數の土、

調子の八卦もあり



鳧鐘、四月は陽數の火、斷金、五月は陰數の火、黃鐘、六月は陽數の土、下無、七月は陽數の金、鸞鏡、八月は陰數の金、平調、九月は陰數の土、上無、十月は陽數の水、勝絶、十一月は陰數の水、盤涉、十二月は陽數の土、一越、月の調子これなり

又人の呼吸聲音の調子は、神仙、双調は肝の臟、膽の腑に通ず　黃鐘、斷金は、心の臟、小腸の腑に通ず、鸞鏡、平調は肺の臟、大腸の腑、盤涉、勝絶は、腎の臟、膀胱の腑、鳧鐘、一越、上無、下無は、脾の臟、胃の腑より通ずるこれなり

一其外生きとしいけるものは、云ふに及ばず、非情無心の草木風聲水音まで、自然の調子にあらずと云ふ事なし、然る間人の目は見んがため、耳は聞かんがため、鼻はかがんがため、舌は味へんがため也、されども調子に至つては、聞く人まれにもあらず、學ぶべきものともせず、誠にいたましきかな、古人は牛の叫び馬嘶を聞き、杜鵑一聲に、世の亂るゝをしる、これみな音律をえたるもの也、おろかなる人とせんや、今時の人は、耳ありても、淫聲を聞き口ありても虛をいひて、終に其身のあたとす、今此尺八も口に

耳は聞かんがため鼻はかがんがため―此二句再版本になし

任せて吹きちらし、野人の耳をうごかさんが爲には非ず、いたらぬまでも、天地鬼神の心にかなひ、妙音不思議の聲を調べ、生長化收（しやうちやうくわしう）の道をしらんため也、もし此道に緣あらば、はからずして妙音の樂師に逢ひて、一息の指南に預らん事をねがふの外他念なきもの也

寛文四年甲辰卯月吉日

中村宗三

寺町通

秋田屋五郎兵衛板

當世こうた揃

行くも歸るも―此唄松の葉の節の部にあり

うらみながらも―是も松の葉にあり、但「うちながむ」を「うちわかふ」とせり

當世こうた揃

新なげぶし

▶行くも歸るもしのぶのナみだれ限り知られぬナ わが思ひ ャン 知られぬナ かぎり知られぬナ わが思ひ ャン

▲わかれるる身は夢こそナたのめ打つな妻戸のナよるの雨ャン つまどのナ打つなうつな妻戸のナよるの雨ャン

▲亂れみだるゝあのくろナ髪はわけていはれぬナ わが思ひ ャン いはれぬナ わけてわけていはれぬナ、わが思ひ ャン

▲うらみながらも又うちナながむ月はゆかりかナうき人の ャン ゆかりかナ 月は月はゆかりかナうき人の ャン

▲秋の夜すがら隈なきナ月をひとり見る夜はナうらめしや ャン 見る夜はナ ひとりひとり

見る夜はヵうらめしやヵン

▲初音ゆかしや身はほとヵとぎす八聲もろともヵなき明かすヵン もろともヵ八こゑ八聲

もろともヵなきあかすヵン

▲物や思ふと問ふ人ヵあらばいかが答へんヵ袖の露ヵンこたへんヵいかがいかが答へん

ヵ袖の露ヵン

物や思ふ―松の葉には「物や思ふと問ふ人あらばせめて語りて慰まん」とあり

▲よしやいとはばつらしとヵわれは戀のためしにヵ身をなさぬヵン ためしにヵ戀のこひ

のためしにヵ身をなさぬヵン

▲逢はぬ昔とあひ見てヵのちといづれ思ひはヵいかならんヵン 思ひはヵいづれいづれお

もひはヵいかならんヵン

▲思ひわするな千代ふるヵとても契りかはせしヵかねごとをヵン かはせしヵちぎり契り

かはせしヵかねごとをヵン

▲あだになすなよその夜のヵちぎりかはす言葉のヵひとすぢにヵン言葉のヵかはすことば

のヵ一筋にヵン

▲三輪の神かやよる〳〵ヵ通ふひるは人目のヵしげければヵン 人目のヵひるは昼は人目

のヵしげければヵン

▲人目おもへば戀しとヵだにもいはで戀しきヵわが思ひヵンこひしきヵいはでいはで戀

しきヵわがおもひヵン

▲あふにかへなば命もヵすてよよもに浮名のヵ立たばたてヵン 浮名のヵよもによもに浮

名のヵたたばたてヵン

▲またの御見はひとむらヵしぐれ定めなき世にヵ袖ぬらすヵン なき世にヵさだめ定めな

き世にヵ袖ぬらすヵン

▲むぐら茂りて荒れたるヵ宿は秋はきにけりヵ人しれずヵン きにけりヵ秋はあきはきに

けりヵ人しれずヵン

▲當世かがぶし

●君とわが中、柴垣ごしよ、人はさがなやゆひたつる、此身はやけよ逢はねばならぬ、
たとへ淵瀬にしづむとも

●まれにあふ夜は、人目を忍ぶ、せめて夢にはうちとけよ、とは思へどもそれもまた
忍ぶ御見にみしゆゑか

●あかぬ別れを、思ぶもしらで、いつもながらの鳥の聲、とは思へども告げわたる、鳥
もつとめの身ぢやものを

●雨のふる夜は、ひとしほゆかし、いつに、おろかはなけれども、殘る言の葉、おもへ
ばゆかし、いつにおろかはなけれども

●人につれなく、あたりもせぬが思ふ人には逢ひかぬる、とは思へどもそれもまた、逢
はぬさきだにあるものを

●ういぞ流れの、女とむまれ、貞女、ふたりの道そむく、しかしまことの心の水は、君
が外には汲ませまい

まれにあふ夜―此唄洞房語園には「忍ぶ」を「包む」、「それもまた」を「憂も又」とあり
あかぬ別れ―洞房語園には「あかぬ」を「つちき」「告げわたる」を「鳥も又」とあり
雨のふる夜―松の葉には上半を投節とせり

●ゆかり思へば、春日の里の、昔男がなつかしや、若紫のこひごろも、昔男がなつかし
や

●光る源氏の、おもひの螢、つゝむともなき契かな、その玉かづらたまさかに、包むと
もなき契かな

●おほしめすやら、その戀風が、きては枕にそよ〳〵と、ねやの空炷うきねの床に、き
ては枕にそよ〳〵と

●いとどさびしき、寢覺の床に、涙なそへそほとゝぎす、昔を忍ぶわが袖に、涙なそへ
そほとゝぎす

▲さんやどてぶし

「戀の關守、たがすゑおきた、おもふ敵には、あはでぞ歸る、つらき人目や、かの業平
の、歌の心に、いかなる君も、あはどおゆるしやれ名も立たじ

「ゆめの、うき世に、さゝのうで、遊べ、あすはこひしき、昨日の、むかし、たれかち

光る源氏―洞房語園には上半のみにて「奥かな」をくり返せり
おほしめすやら―若みどりには「ねやの空炷」以下を出せり
いとどさびしき―松の葉には前半のみ出せり
さゝのうで―酒飲んで

とせの、月日をおくる、今宵かぎりと、いよでたをのこ、強きお酌にいかなる下戸も
つがばおのまさんせのも酒を
「唄の、一ふし、たれぞときけば、籬ながらも、かくれはあらじ、君の、お庭の、草葉
となりと、強き、ゆふべの、風ともなりし、吹かば靡かさんせ名もたよじ
「うらむまいぞよ、つれなき君を、人のつらさも皆われからよ、あまの刈る藻にすみぬ
る蟲が、思ひかひなき涙の色、お笑ひあるな名のたつに
「かゝるさんやの露ふかけれど、君がすみかと思へばよしや、玉のうてなも、おろかで
ござる、人はともいへやれかくもいへ、よその見るめも、いとはぬわれを、お笑ひあ
るな名のたつに
「つらき、人より、つれなき命、あすは露とも消えなば消えよ、こよひ、ばかりと、定
めたをのこ、つよき心に、いかなる君も、引かば靡きやれ名の立つに
「つひにのがれぬ、無常の世界、死なんさきより焼かるゝ此身、胸のけぶりは山谷の野

かゝるさんやー洞房語園には露を草とし「われ」を「われぞやに」とせり

邊の、鳥ともろとも歌はば歌へ、さゝんせ盃のも酒を

▲ろうさい

▲戀にこがれて露とも、消えば、あとはとにかく、君たのむ
▲立つる錦木かひなく朽ちて添はで年ふる身ぞうらみ、葛の葉
▲いつの月日に相馴れそめて、今ははなりようかうらめしや、なにの因果にあひ馴れそめて、人目つゝめばうやつらや泣くも泣かれず
▲山のはに西へ東へわたりしさとも月の光はひとりものかは
▲山のはになさけないその身はおしどりの、いはで年とる、身ぞつらき
△松の林のこのしたかげも君がござらにやうらめしや
△夢の世に見たや聞きたや、山ほとゝぎす、姿ならずは聲なりと

▲江戸ろうさい

○つらき人、より〳〵、つれなき命さても、はかなのわが身やな

戀にこがれて—此句淋敷座之慰には「こがれこがれて」とあり
立つる錦木—松の葉には「身ぞうちみ葛の葉を身ぞつちき」とあり

○いとどその、夜も〳〵、歎きて、あかす、床も〳〵枕も浮く、ばかり
○思ひきろ、とは〳〵、たよりの、なさけ、じつは〳〵、浮世の、すて、ことば
○忘草、がな〳〵、一もと、ほしや、折りて〳〵、そだてょ、見て、わすりよ
○阿波のなる、とに〳〵、身は、沈むとも、君の、仰せは〳〵そむく、まい
○頼むまい、その〳〵、つらきの、君を、あふせ〳〵に、かはる身を
一とりのねも、鐘もきこえぬ里もがな、ふたりぬる夜の、かくれがにせん
一篠竹の、窓の嵐に目がさめて、君もおよらず、われもねいらず
一ながらへば、また此頃やしのばれん、憂しと見しこそ、八幡こひしき
一手に手をしめて、ほと〳〵とたょく、われは、そなたの、てつどみか
一山のはこそ、月はあれ戀路のみちに月はあらじな
一思ひきれとは、身のまょか、たれかは切らん、戀の道
一阿漕が浦にひく網も、たびかさなれば人も知れ、さりとてもいなの小筵のせめて一夜

阿波のなるとー
洞房語園には、「とは思へども世の中の人の心は飛鳥川」の句を後に添へたり

は
一菊のませがきゆひそめて、なか〳〵今はなか〳〵いまは昔こひしや身のうさを

いせぶし

■秋の夜の鹿はないても明かす、人目忍べばうやつらやェィ泣くも泣かれず、忍べばつらや人目ェィしのべばうやつらやェィなくもなかれず

くわんとうほそり

大ざかくだりに、十七こぢょろにゆきあうた、とのとねたやらのさて、髪がそょけたしばし、おまちやれ、誓文たてょ聞かしよに鹿島香取や諏訪熱田までうきすの明神伊勢や熊野さ愛宕白山とのと寝はせぬ、けさの嵐にのさて、髪がそょけた

當世こうた撰終

八幡町通ふや町角　山本七郎兵衛板

松の葉

松の葉序

それ吾朝の音律は天の鈿女の命より起りて霰ふるらし外山のかつら色に見ゆるをいかにせんと庭燎の唱歌にはじまりける、かつ人王百七代正親町院の御宇永祿の比琉球より蛇皮二絃の樂器渡り、和泉の國堺にすめる琵琶法師中小路が手につたへ、長谷の觀音の靈夢によりて一絃のまし三絃とせしを世に三味線と呼びて、しらぶる音にあらゆる呂律そなはらずといふ事なし、是一より二を生じ二より三を生じ、三より萬物の音聲を生ずる理いたれり、かの中小路より石村虎澤澤住相うけ、次て寛永に攝州に加賀都城秀堪能ならびなく、九重に遊び東武に跪き官職に昇進して、加賀都は柳川、城秀は八橋、みな僧官に准じて檢校に經のほりければ、此三絃の鼻祖兩家の棟梁とはなれりける、傳ふる所本手端手新曲綿蠻として、淺利檢校佐山檢校出田檢校市川檢校朝妻檢校藤島勾當、今や都には小野川檢校三橋檢校猶等覺一轉のひかりをあらそふ藤永勾當熊川勾當松澤勾當木崎勾當早崎勾當豐田勾當清田勾當倉橋座頭等、武藏には岩崎檢校豐橋檢校連川勾當安數川座頭等、雪上に霜く

はほり錦江に桃花飜り、塵動き雲逗るの功、妙手として十の指さす達人なり、やつがれとしごろ閑暇の茶菓に是をもてあそびて、知音のこゝろざしありければ、よりよりかの本手端手長歌端歌吾妻淨瑠璃新曲の唱歌を草書し、かつ古今百首の投節をくはへ、花晨月夕の心やりにかいつくるを、ある人ねもごろの求めに應じて、櫻木に命ながうせんとするにまかするもの也、此花のもとにあそぶ好士あらば德孤ならず吾いづくゝぞかくさんやく。

于時元祿十あまり癸の未龍集の涼み月秀松軒の木のもとにかきあつめぬれば、松の葉と名づけぬるもむべなるべし。

松の葉　第一卷

○三味線本手目錄

一 琉球組　二 烏組　三 腰組　四 不祥組　五 飛驛組　六 忍組　七 浮世組

此七曲を本曲といふなり、石村虎澤琉球國より相傳のうへ、手をなほし加へて一作となし、今の世に至りて三味線第一本手組の濫觴となれり

○端手目錄

一 待つにござれ　二 葛の葉　三 比良や小松　四 長崎　五 下總ほそり
六 京鹿子　七 端手かたばち

此七曲を新曲といふ、柳川檢校作也

○裏組目錄

一 賤　二 錦木　三 青柳　四 早舟　五 八幡　六 翠簾　七 なよし

此七曲柳川檢校作也、此内早舟相傳の時師へ一禮の法式あり

てうりやう云々
―はやし詞なり

本手

㊀琉球組

○比翼連理よの、天にてる月は十五夜がさかり、あの君さまはいつも盛りよの
○おもひを志賀の松の風ゆゑに、しなでこがるよ〳〵
○深山おろしの小笹の霰の、さらりさら〳〵としたる心こそよけれ、險しき山の九折の
かなたへまはり、此方へまはり、くるりくるくるとしたる心は面白や
○とろり〳〵としむるめの、笠のうちよりしむりや、腰が細くなり候よ
○とても立つ名がやまばこそ、此方へお寄りやれのう、柴垣ごしに物言はう
○小原木買はい〳〵黑木召さいの、てうりやうふりやうひゆやりやにひやるろ、あらよ
ひふりやうるりひようふりやう

㊁鳥組

たいが―大河か

世にふる―世間にひろがる

ではのしほやー田羽の鹽屋か

○鳥もかよはぬ山なれど、住めば都よ我里よ
○我戀は千本小松の枯るるほど、たいが水ひて埃たつほど
○みるめばかりの戀をして、千賀の鹽釜身を焦す
○いへば世にふる、言はねば心がもだ〳〵と
○お目と目と目を見合せて、はなれ難なのその俤を夢にも見もせず、うつゝになりと
　も逢せてたもれ、逢ねば心がもだ〳〵と、おもひの種や、あこがるゝ身をなにとせう
　その
○京では一條柳屋が娘、四割帶をたすきに掛けて、いかにも腰が、しなやかな〳〵
○いざ詣ろ六地藏へ、ほとけに隔はなけれども、さりとてはでのしほやが建てた六地
　藏、えいそれしほやが建てた六地藏
○忍びの殿樣にふらゝんとさげさしよ、緣のあるゆゑ餘念がないよの

㊂腰組

舟づる―舟が出るなと―何とひと花ごころ―一時の浮氣心

○腰に下げたる巾著は、これも憂き人の縫ぢやほどに
○道で見たりともわすれまい、枝垂やなぎの振ぢやほどに
○雨はふるとも雪ふるなさ、忍ぶ細道の笹の撓むに
○成ると成らずと文をばつくせ、心强やつれなや、とにかくに我は數ならぬ身ぢやほど
　に、君來うか〳〵往こか、こずは戻ろに
○一夜ふた夜と馴れ染て、明日は舟づる、なとせうぞの、恨めしや
○いやと言うたものかき口說てのう、何ぞやそなたのひと花ごころ、思へや君さま、叶
　へやわが戀、あらうつゝなの浮れ心や、揉まいの〳〵さどら揉まいの、我等も若い時
　は殿にもん揉まれた

㊃不祥組

○若いが不祥で負ひまるらせうかの、背門柴垣の破れたを
○思ふまいとの鉦を、ちんからころりと打てば、罰やら猶おもはるゝ

○橋にわが身を投掛けて、渡らせうよの、とろ〳〵〳〵と、やれ渡らせう
○月の夜に打つ砧の音の、えいはら〳〵ほろ〳〵はらほろと、又してもおどろく夜も〳〵
あるに、獨り寢よとは何事ぞ、思はざなきそ、増す花狂しようずもの、わざくれ
○わざと來んとはおしやれども、眞實おもへば恥も人目もおもはくも、思ひ出されぬも
のぢやもの、しかしながら君は只増花のあるゆゑ
○十七八はうんえいころり長押のほこり、皆殿達の、目に入りた〳〵、目に入りたらば藥師
へこもれ、藥師の前で、めぐすししよ〳〵

わざくれ―まゝよ

めぐすし―目醫者

㊄飛驒組

○弓矢八幡寢はせねど、寢たとおしやらば、なとせうぞの
○一つこしめせたぶ〳〵と、殊にお酌は忍妻々々、れんぼれれれつの、れいしよじやう
にそはどれつのれ
○これの千代女がかみわけは紫竹こだけに四の節、加賀や越前美濃尾張越後京根來粉河

こしめせ―きこしめせ
れいしようじやう―靈照女か
こだけ―小竹

坂本で所望めされた
○あすはぢよずもの、舟がぢよずもの、おもたけもなとおよる殿ごや、あゝお寢る殿ごや、飛驒のをどりを、ひと踊り〳〵
○船のなかには何とお寢るぞ、苫を敷寢に楫を枕に、ひんだのをどりを一踊々々

ぢよずもの―ようもの

㊅しのび組

○いよ忍び〳〵て心嬉しや、梅に囀る鶯の、夜は梢に宿るとも
○思ふまいよの、やれそれほどに、顔に紅葉の立田山
○いとま乞には來たれども、碁盤面で目がしげければ、まづお待あれ、柴の編戸も押せばなる、あはれ霰がはらほろと降れがな、其間にあゝ笑止や立つ名や、笑止と立つ名や、忍踊はおもしろや〳〵
○戀をせば〳〵、二十三夜の月を待て、月の儁なきものを、てててからこしやんぎしやかんこはらりついやひよつついや〳〵つやにちやうらゝにやうつほゝ、忍踊はお

もしろやく〳〵

○我戀は綟子の袋にいろ小袖、何と包めど色にいでさふろ、やれいで候、逢見てのちは何とせうぞの、戻ろやれ、しやなら〳〵と

㊐浮世組

○誰も浮世はかりの宿、さのみ人目を包むまじ、よやきみしやらり

○文もやるまい便宜もせまい、返事さへせぬ憂さつらさ、君をば人に思はせて、かほどにつらきものぞとおんもひ思ひ知らせでとは思へども、身の上になれば更に思ひ切られぬ

○とても立つ名に寢てござれ、ねずとも明日は寢たとさんだんしよ、花の踊をのう、花の踊を一をどり

○我は小鼓殿は調べよ、かはを隔てょのう、かはをへだてょ寢にござる、花の踊をのう、花のをどりを一踊

さんだん—讃嘆、いひはやすの意

かは—皮、川

寢—昔にかく

○いとし若衆と小鼓は、しめつ緩めつしらべつょ、寢入らぬさきになるかならぬか〳〵

○みやまやるまい、深山瀧の水はうちやうていつく、ちやうど打てば、うちやうていつく、つく〳〵しんたんたらつく、丁ど打つ、若衆をどりを、のう若衆踊を一をどり

葉手

㊀まつにござれ

○待つにござりたいとしの君やのう、今夜ござらざ焦れ死のう

○とても緣なき中ならば、などや始のつらからん、いとど烈しき吹上濱に、とりを限にかのさま待てば、寒き嵐も身にしまぬ

○われが殿御はとう五郎どの、朱雀粟田口より石また曳きやる、えいややころさにやつというて曳きやる、お聲きくさへ四肢が萎ゆる、まして添うたら死のずよの

○君と我とはのや篋の絲の、切れて離れてまた結ぶ

なら—成、鳴

とり—雞鳴

○忍んだりやな、忍ばれたりやな、裏の細道小藪から
○おもふ儘なるのや今宵かな、月は朧につまはきて、もみぢ葉を見よこいは散る

㈡葛の葉

○さてもやさしの、いよ葛の葉や、何を便りにはひ掛る、いよえいはひかゝる
○君を松島をしまの海人の、袂干がたき我涙、いよえいわが涙
○深山清水はそこから澄むが、君の心も底からか
○山で小柴をしむるが如く、今宵其様としめあかす
○淺き契にあひ馴れ染めて、ふかき思はあゝさて涙川、君に逢瀬を待つばかり、あゝさて待つばかり
○こんどござらばもて來てたもれ、ぎふのお山の檜の木の枝の、浮世がかりのおもひ葉を

㈢比良や小松

比良、小松、鹽津、海津、坂本―皆近江にあり

○比良や小松の朝がよひ、褄が濡れ候磯打つ浪に
○鹽津海津にあるときは、上りたいよの坂本へ
○門に立ちたは八もじさまか、夜風身の毒内ござれ
○いつの何時そなたを見初め、我が身はたゞ磯邊の千鳥、鳴かぬ間もなや君ゆゑに
○こゝは三條か、やれ釜の座か、一夜泊りてしげりまゐらしよ、われが殿ごは名古屋にござる、扨もお留守は物憂いものぢや、えい〳〵さら〳〵のう石をひく、えい〳〵やつというて曳くには、夢だんべいの、えいというて曳けばお暇きやるかのう、いよやつというてえいとへ、えいさらえい

釜の座―京都の地名

㈣長崎

○みやいちがよれた〳〵、しよぢよがなさけ
○長崎の鶏は時知らぬとりで、眞夜中にうたうて〳〵君を戻す
○くれなゐの三尺手拭、形見に見よとて置いて行く

咲くと―咲くもの意

さんたまりや―Santa Maria

○紅は薄くなるとも、そもじと我とは一期契るべいぞよもさ、白髪に小枝の咲くと契るべいぞよもさ

○昔より今に渡りくる黒船、縁がつくれば鱶の餌となる、さんたまりや

○思はぬ君にお情は無益、うき身やついて歎く我等に落ちさせられぬ

○名所さまぐ多けれど、吹上の濱は和歌の浦、さあ天神玉津島、布引の松山いく千代千代と、和歌山の松、お詣りあれの紀三井寺

㊄しもさほそり

○この程は戀ひつ戀ひられつ、今宵は忍の初でござり申すよの、さあいよへいよへ、打解けてゆらくとお寢れのうさ、まだ夜は夜中よ、しげれとんと君さま、さあいよへくく

○まことやら鹿島い湊に、彌勒の御船がついてござり申すよの、さあいよへくく、帆柱は黄金の帆ばしら、帆には法華經のごのやまん経物、さあいよへくく

きんぎ―金銀かたけりやろ―猛りあらう

○甲斐の國なる信玄さまのな、一度もござらぬ、二度もござらぬ、おちよほ忍ぶに六つの苦が候、まづ一番に雨に霰に夜露に柴垣、のうさて犬のあだ吠え、それ月はなほ月は、のうさて月はえせ者

○忍ぶ細道に松と胡桃は植ゑまい、待つ夜に其身がくるみでもなし、なよさてまことにくる身でもなし

○去年の竹とよ今年の竹とよ、しどろでもどろで、のうさて節がそろはぬ、なよさてまことに節が揃はぬ

○誰でござり申す、壁越のまた鼠鳴、今宵は殿御の後に寢て聞く、寢ても聞けとよ、おきても聞けとよ、今宵の夜がさて明日の夜になるとも、逢はずば戻るまいよの、なよさてまことに戻るまいよの

○扨もつれなのきんぎんさまや、きんぎござらざ、ぬめりてくらそ、それを誰ぞと尋ねて聞けば、六條下の町の和歌山さまの内の山の神が聞いたらば、たけくたけりやろ

ものを

㈥京鹿子

○是は京鹿子色もよや、目結手際もよや清や、あら都戀しやのう、都のしてたち戀しやのう

○これは京小袖色もよや、紋がら手際もよやきよや、あら都戀しやのう、都の染殿戀しやのう

○しんの闇にも迷はぬ我を、あよ扨そさまの迷はする

○吹けよ松風、あがれよ簾、今の小歌のぬし見たや

○花とならばなよ、たんだおん身は紅葉の色よ、のうさて日數にそひて色まさる

○梅の香を櫻ばなに宿らせて、青葉のまよに眺めばや

○尺八の一節ぎりこそ音もよけれ、君と一夜は寢も足らぬ、あら心なの君さまや

○そちと此方とは松に藤のさがり枝のごとく、離彼時にかゝる、かゝるな仇が身に纏に

たんだ一只

るる

㈦はで片撥

○笛による鹿は妻故に死する、我等もさまに、やれ命すてうずよの

○ありがたの利生や、お有りがたの利生や、佛まるりの利生で妻に行逢うたのう

○朝間とく起きて手水瓶をみれば、我がおかぬ花のあるも不思議やな

○不破の關の板間に月の洩るこそやさしけれ

あかれず一圍仰にかく

裏組

㈠賤

○賤の身なれば色には出さぬ、あ只心のうちに焦るよ

○立寄りてむすぶ山の井の、あかれず飽かぬ中はな、松の二葉よ、千とせ經るまで

○筆でかくとも繪にうつすとも、さらに盡きせじ松島の、波にうつらふ月の影、島の數

しん知らぬ

○たんだ人には馴れまいものよ、馴れての後は、るょんるょ身が大事なるもの、離るるが憂いほどに

○かづいた水がゆり〳〵たぶつき滾るょげなものを、現なや殿はみやこに

㊁にしき木

○神のおまへの御注連縄、そよ吹く風にも靡けばなびく、つらき心を打捨てょ、ものぐねにななめされそ、ふふりわるや、打解けよ、くすみても詮なや

○山がらが籠のうちでの恨み言、籠が小籠でもんどり打たれぬ

○七里小濱のな、砂の數ほど思へども、緣がうすいやら添ひもせぬ

○をつとは錦木とり持ちて、鎖いたる門をたょけども、内にこたふる蟲の音の、思ひきろやれ戀の道、きりはたりちやう〳〵

○忍べども思ふ君には逢はずして、村さんめはは〳〵ほろと降るほどに、思ひきろや

きりはたり云々―虫の聲なり

村さんめ―村雨

れ戀の道、きりはたりちやう〳〵

○とてもお捨ちやるものゆゑに、去りがたいとて抱かりようか、浮世の中のさんだんにさ、言ひつる事よの、言はりよよりもなまなか一夜はまゐるまいよ、いや〳〵いやなら始に否とはおしやらで、今さら何とならうぞのう、思はざなきそ增花ぐるひせうずもの、わざくれ

㊂青柳

○さても其方の立姿、春の青柳絲ざくら、心がたよ〳〵と

○文もやりたし便宜もしたや、俤に立つそのおもかげを、忘れもせで身に添ひ、そぞろに浮れきてうきやうこつや、正體なしや憂きや戀のとまらぬ、只兎に角に恨めしや

○枕に掛るみだれ髪、いとど心の亂れ〳〵てやるせなや、よしや其身が何とならうぞの

○緣なき思に身はほれて、朝顏の花の露よりもろき身をもちて、さのみ心な盡くさせそ

うきやうこつや―うきやうつゝやの衍か

ねいろ—根入、寝入
とぎ—磨、伽
おかた—奥方
うたい—打たう

○十七八は砂山の躑躅、ねいろとすれば搖り起さるゝ
○曇り鏡か我が身は、思ひまはせばとぎほしや〳〵
○明日は殿ごの砧打、おかた姫ごも出てうたい、きぬた踊はおもしろや、砧をどりはひと踊

㊃はや舟

○祝ひめでたのもう、嬉しめでたのうよう若枝も榮ゆる、のう葉もしげる
○ながの長崎の長のるすんの留守すれば、思ひ出すことは宵と夜中とのう曉と、なごやまぢよのう、肥後ぢや八代熊本ぢや、鳥も得かよはぬ山なれど、住めば都よ我里と
○四角柱ののう、四角柱のまたのんえいそれ角、角の無いこそ添ひよけれ
○花は咲いてものう、梅は開いても花さいて、無益のあだ花よ
○これがいとまな、ふみ手には取らいでなま中に

宮—安藝の宮島
はつかぶいち—二十日市
げんざ—源三といふ人名なるべし
こひ—鯉、戀
めがきみも云々—目がさめて君も寝ず我も寝ずとの意か

○山ぢや谷間の深谷おろしの木の葉埋れのう、柴の庵もまたのんえいそれなつ、都なれどものう旅は憂や
○沖の引く汐に竹に油を塗るやうに、とろり〳〵と唄うて名乘りて、漕ぐや船方はえい上樣の御座船か、またのんえいそれ、艪ではやらいで唄でやる
○おちよぼちよぼ樣の態は椋鳥ぢや、聲は鶯ぢや、しゆくしやかむくしやか、さんはかしんはか、しんからきうたかずんばいほ、眉目が能ござれば聲も詞ものうしなやかな
○宮へは三里へのうえい、三里も近さんり、はつかぶいちのげんざが塗物は、漆では塗らいで、梔子ばかりでさつと一刷、えいそれはつたらずんでんどう、そのやうな塗物は、たゞはくるゝとも、おらはいやゝ〳〵いやで候、やがて剝ぐるに
○猿澤の池の水ではない、こひがすみ候、身の池に
○篠竹の小篠竹の窓の嵐に、めがきみもお寝らず、われも寝ず
○櫻木に鶯がとまりて、琴の響に花がちる

○さきの月の廿五日に定めたるには似ぬ、照るも曇るも冬の日も
○山は雪ぢや、麓は霰、里は雨、うらへまはるも其樣ゆゑ
○沖を漕いで通るは、明石の浦のげんざが本船か、さて艪ではやらいで唄でやる
○一の枝ひけば二のえだ靡く、なびけや小松、一のえだつりりんり〳〵

㊄八はた

○月は八幡のまだ空にも、往の〳〵とは思へども、後に心がとどまりて、後髪が引るよ、
なんぼ戀には身が細ろ、二重の帶が三重まはる
○たつるお茶には泡たよで、我が浮名はむら〳〵に立つ、むら〳〵に立たば立て、まこ
との心解けずばしよぐわんぢや
○あの山陰をすぐに來るだに遲いになよ、眞實恨言さしおいて、まづ抱ておよれのう、
なよしんじつ
○思ふ門には竹をうゑて、雪の降りたる暁を、つれなき人に見せぢや、靡く竹の樣

しよぐわん―賞玩

○ひとの嫁ごと竹にさく花、よやとおもへばやへ曲もない、うまおぢや詰ないしやもしや
ももちくなにしよ、そうてなにしよ、それしよしやなにしよ、若衆をどりをのう、若
衆踊を一をどり

㊅みす組

○御簾の俤もの越に見そめ聞きそめ、うか〳〵と戀をして、痩するは人の知らずして、
夏痩をすると、やれ推めさるよ
○露に亂るよ絲薄、そよ〳〵と吹來る風にも靡きそろ、現なや正だいなしや、とは思へ
ども、そもじと我とはよろづ世までも千代までも
○風にまかする浮雲も、吹く方へゆく、目でしめばひくと思はれ、つれなの君の心根や
○かづいた水が搖りこぼるよも浮世の習、さてもつれなや、しやうだいなしや、憂きや
憂や、ならぬは破れた尺八かのう
○竹がな十七八本ほしやな、浮名や洩さじの中戸に組も

○破れた尺八手なかけそ、とてもなるまいもの故に、われた尺八手がござる、じいじとしむればなるものを、取りて吹きて見たれば、ふしがちやうとした、れつろれつろりよれつのれがつれつろ

㊐なよし

○なよし〳〵は梨のあだ花、なよしなりはしもせで、なると名の立つなよし

○鯵小竹にあらねども、さらに〳〵さらに知らぬもの、ともすれば何ぞよ其方のもの

のぐねり、何となりとお好みや、鐘を打とかのう

○しんきはりよやれ、濱へ出て沖のしま〴〵を見てなりと、あれに見ゆるは志賀の浦、こがら崎一松、田舍くだりの道すがら〳〵

○田舍くだりの旅の殿、名所の月がながめしやんとのう、しやんとながめたりよさ、そろいとしうて遣瀬なや

本手端手裏組終

しんきはりよー
辛氣を晴らさう

祕曲相傳之次第

初傳　搖上　二傳　亂後夜

此二曲を新曲の祕曲といふ也、誓盟をもつて相傳の時師へ一禮の法式あり、亂後夜以前に後夜敦賀ごやといふ二曲あり、此曲に手を加へて三曲一にして亂後夜となし傳授する、後に晴嵐といふ一曲淺利檢校手をくはへて彈く也　口傳

三傳　七つ子　此曲は浮世組をさきへ彈きその跡にて彈く也　四傳　松むし

五傳　淺黃　六傳　茶碗

此三曲を新組といふ、七つ子相すむうへ次に傳授するなり

七傳　堺　八傳　中島

此二曲を本曲の祕曲といふ、極最上の傳授誓詞神文ありて、一卷の書を附屬するなり、師へ一禮の法式あり　口傳

右相傳法式之次第者柳川檢校より淺利檢校相承し、淺利より今都の早崎勾當にうけつぎぬ、こころざしあらん人は早崎より口受あるべき也

松の葉第二卷

長歌目錄

一 若みどり 佐山檢校作
二 まさみち 同人作
三 不二まうで 同人作
四 源五しう 同人作
五 三谷をどり 同人作
六 雲井ちうさい 同人作
七 木やり 同人作
八 戀ごろも 同人作
九 小夜ごろも 同人作
十 もしほ草 同人作
十一 櫻づくし 同人作
十二 冬草 同人作
十三 四季 市川檢校作
十四 やへ梅 同人作
十五 春日野 同人作
十六 はるごま 同人作
十七 手まくら 同人作
十八 鎌倉八景 同人作

十九　わか草　同人作
廿一　狹ごろも　同人作
廿三　戀づくし　朝妻檢校作
廿五　山づくし　同人作
廿七　川竹　同人作
廿九　幾春　同人作
卅一　七夕　同人作
卅三　東山八景　同人作
卅五　うきね　同人作
卅七　香づくし　同人作
卅八　時雨　小野川檢校作
四十　あだ枕　同人作
二十　春風　同人作
廿二　らつひ　同人作
廿四　笠寺　同人作
廿六　夕され　同人作
廿八　花の宴　同人作
三十　浪まくら　同人作
卅二　引車　同人作
卅四　夏草　同人作
卅六　小むらさき　同人作
卅九　月見　同人作
四十一　花見　同人作

四十二　玉くしげ　同人作
四十四　梅づくし　爲澤檢校作
四十六　晒　北澤勾當作
四十八　秋草　松岡檢校作
五十　しのゝめ　藤島勾當作
武州花都作
四十三　色香　同人作
四十五　小笹　生田檢校作
四十七　かぞへ歌　野川檢校作
四十九　戀草　松岡檢校作

初音、松がえ、嶺、きてふ、吉野、藤枝、八橋、小紫、泉川、染川、薄雲、夕霧、たのも、八しほ、いづれも遊女の名

㊀若みどり

春は初音の松がえ引きて、君が千とせを八千代とおもふ、その常磐木の若緑アヒノテ梅の花がき薫るより、鶯きてふと囀りかはし、吉野の花も櫻木藤枝、色なつかしき黄昏に、山郭公音づれて、明け易き夜のならひには、夢の浮橋なか絶えて、文もかよはぬ戀の路、蜘蛛手にものを思ふこそ、かの八橋の杜若、若紫や濃むらさき、由縁ある身に頼みをかけて、縁にしを結ぶ泉川、いつ逢ひ馴れてあひ染川の、あだ浪かよるぬれ衣の、袂涼しく秋たちて、荻ふく風に亂るゝ露の、その玉葛かけしより、わする間もなき我が思ひ、空に浮るゝあの薄雲に、夕霧かよるその月のころ、人まつ宵のものさびしさを、誰に語らんみ吉野の、たのもたよりも盡き果てゝ、恨み涙に袖しほる、色は八しほに染めなしおいて、もみぢ散りしく高雄の山の、嵐につるゝ村時雨、幾度ぬるゝ我袖アヒノテ拾はば消えん玉笹の、霰はつ雪ふらば降れ、我ふる妻は〳〵實からいとし

㊁さみち

とゐや小袖のつまゆゑに、歩行習はぬ芝道の、露に起伏ししをれつゝ、軍みだれのことなれば、嵐ぞつらき花のまへ、ちり〴〵になる身の行方、まさみちの御ン手をとり、たどろ〴〵とのんさて、まことに君ゆゑなれば、遙かに後を見かへなば、ありし所に立つ煙、いたはしやな我つまの、何とかならせたまふぞと、其方の空よとながむれば、涙の雨の玉島や、はや入相の金が崎、いたはしや老の身の、さぞやもの憂くおほすらん、我が思ひに亂髪、ゆひかひもなき身なれども、南無や宰府の御ン神、いにしへの憂を守らせたまへやと、深く祈誓をかけ帶の、結ぶちぎりの朽ちせずば、つまにはやがて逢ひに相あふ、松こそうれしかりけれと、語り慰み行く程に、蘆屋の關にぞつきたまふ

㊂富士詣

宿の首尾よく繕ひおきて、浮かれこがるゝ二挺立に打乘りて、思ふ君をばはや三俣の、上の茶屋よりわけよしが招く氣の毒に、いよのほんほわがえだもさんよへこの、いよこのへ〳〵はんもひちやさと、兩國橋までのりつけて、花火々々をめせさせ買はんせの、よい